伯父と姪の　故知（こち）問答

東南はるかに霊峰白山の雄姿を仰ぎ、縄文遺跡を有する御経塚の西北端から八田（白山市）や専光寺（金沢市）の日本海の浜辺へは十キロに満たない。手取川扇状地の中間部に位置して、平安時代の源平争乱などに巻き込まれた加賀の武士たち、戦国時代の一向一揆等々、この地に住むひと達は経済的・歴史的にさまざまな役割を演じてきている。

30代なかば、小学生の息子を持つ史恵（ふみえ）さんとその伯父訪古継彦（つぐひこ）を主な登場人物として、これからわが町の身近に残る歴史的事象のひとつひとつを、日常生活との関わりのなかで語っていこう。

小学生の篤志（あつし）くんの素朴な疑問や、人生経験に裏うちされた継彦伯父の柔軟な解釈、さらには若い母親のしなやかな知的好奇心など多角的な視点を織りまぜながら歴史的な事柄を眺め、ときにはミッシングリンクを大胆な推理で補う冒険をも試みるシリーズとしてみたい。

題して「－わが町歴史探索－『伯父と姪の　故知問答』」。故知問答とは、「温故知新」の熟語や「故郷を知る」などを含意する。お堅い人物を指して『コチコチなひと』と形容するが、遊びこころ半分堅さ半分のこち問答の意味をもこめる。さて、これからいかなる展開が待っていることでしょう・・

〔お断り〕
文中、☆印で前後を囲んだ箇所は、各章のテーマを展開するための基本的なデータ。様々な書物からの引用ゆえ文体もバラバラですが、おおむね原文通り採り、参考文献として注記で、章末に一括表示しておきます。
その他の情景描写や会話文は、すべて筆者の創作。歴史風味の会話調エッセイとしてお読みください。知識不足からくる誤解や多少の曲解もあろうかと存じますが、寛恕のほどをあらかじめ願っておきます。

＜歴史探索リスト＞

			ページ
0001	:	僧殺し街道　（下林・惣五郎橋）	４
0002	:	徹通と大乗寺　（太平寺・徹通荼毘の墓）	６
0003	:	作善（さぜん）と経塚　（御経塚の経塚）	８
0004	:	道興の歌碑　（矢作・藤岡諏訪神社）	１０
0005	:	三林善四郎の館跡　（下林・定林寺）	１２
0006	:	道路元標碑　（本町三丁目・本町児童館）	１４
0007	:	弁慶の力石　（本町・布市神社）	１６
0008	:	薬師如来の額　（下林・薬師日吉神社）	１８
0009	:	夢のお告げ　（徳用・光松八幡神社）	２０
0010	:	厨子の狐　（三納・日下日吉神社）	２２
0011	:	絵馬と石燈籠　（粟田・豊田日吉神社）	２４
0012	:	閑話休題　（１）	２６
0013	:	献穀田・お田植え式	２７
0014	:	品種育成に心血そそぐ　（「大場」～「コシヒカリ」）	２９
0015	:	村御印	３１
0016	:	先人からの遺産　（農事社と耕地整理）	３３
0017	:	移動班　（早場米地帯）	３５
0018	:	松金線　（電車）	３７
0019	:	木呂川　（木呂揚場）	３９
0020	:	加賀の白山もえ候	４１
0021	:	七ヶ用水　（手取川）	４３
0022	:	歌舞伎「勧進帳」	４５
0023	:	平家物語「鵜川のいくさ」	４８
0024	:	林氏の台頭　（扇状地の開墾）	５１
0025	:	源平合戦から承久の乱まで	５３
0026	:	閑話休題　（２）	５５
0027	:	高尾での攻防　（加賀の一向一揆）	５６
0028	:	長享一揆のスローガン	５８
0029	:	左義長	６０
0030	:	虫送り	６２
0031	:	じょんから	６４
0032	:	郷土史への視点	６６
0033	:	御経塚の縄文遺跡	６８
0034	:	日本人とは・・	７１
0035	:	末松廃寺と和銅開珎（寶）	７４
0036	:	富樫略史　（じょんから音頭）	７６
0037	:	末松廃寺と郷用水	７８
0038	:	扇状地の開墾と支配　（勢力交代）	８０

［登場人物］

伯父		訪古　継彦（ほうこ　つぐひこ）65歳 温和で世話好き、話好きな旧家の当主
姪		布川　史恵（ぬのかわ　ふみえ）38歳 しっかり者の元気なお母さん 長く都会生活して野々市に帰郷
姪の子		布川　篤志（ぬのかわ　あつし）11歳 野々市生まれのスポーツ大好き少年

・原作　　：野々宮　三継
・編集　　：（公財）野々市市情報文化振興財団
・協力　　：カメリア・パルの会、ほか有志
・ｷｬﾗｸﾀｰ：金沢工業大学漫画研究会

※本編は、インターネットの情報サイト「ののいち地域事典」（http://tiikijiten.jp）内のコンテンツに掲載されているものを一遍の冊子としてまとめたものです。
　小さい画像やリンク先の情報は、サイトの方でご確認してください。

　なお、「伯父と姪のこち問答」は、2009年（平成21年）8月から2012年（平成24年）4月までの2年8ケ月間にわたり、随時ののいち地域事典に追加収録されました。

0001：**僧殺し街道**　下林・惣五郎橋　>>場所：

林口川の堤防敷を利用して設けられた遊歩道での、伯父と姪との、ある日の会話。

「よお、史（ふみ）ちゃん、散歩かね」

「ああ‥　伯父さん、この遊歩道、花がきれいなので、時たま来ています」

「最近はいろんな人が通って、評判はいいようだ‥」

「気持ちがいいもの。ところで、この前篤志に聞かれたのですが、あそこの橋の名前、『そうごろう』橋と読むんですか？」

「そう。私の若いころは、どんなイワレがあるのだろう‥。佐倉惣五郎という江戸期の有名な人物など連想して、なにか事跡を残した人の名かなとも思ったりして」

「普通はそう考えますよね」

「ところが、このあいだ町史を読んでいると、おもしろい記事に出会ったんだよ」

旧街道絵図［注1］

☆太平寺を南北に通る街道を、太平寺街道と呼んでいた。
　太平寺より下林、清金、木津（こづ）を通り、三反田（さんたんだ）、寺井へと続く道で別称、僧殺し街道、坊主殺し街道とも呼ばれていた。昔、太平寺の僧が賊に殺害されたことに由来するという（『加賀志徴（かがしちょう）』）☆［注2］

「『僧殺し街道』は、文章を目で追っているかぎり『惣五郎橋』とは何の関連も感じない。だが、僧殺しをかな書きにすると、『そうごろし』となり一瞬あっと思った」

「へえ、おもしろそうですね」

「同じ町史に、次のような記事もある」

> ☆下林地区で僧殺川（そうごろしがわ）とばれた十二人川には十貫橋、大塚川には郷川橋が架けられていた。☆[注3]

「いまは林口川と呼んでいるが、この川を僧殺川と昔はいっていたのだ」

※　※　※

県道松任矢作線の昭和 46 年以前の旧道は、下林南交差点から集落内へ北に入り、下林会館まえで左に折れ、出村（三丁目地内）の南端を通って長竹の方へ抜けるコースだった。
くるま社会に備えた拡幅工事に際して、集落内の通過をさけ、その当時は水田だった南側の土地に今の形につけかえたもの。惣五郎橋も、その時に新設された。

「その当時の、県もしくは町の工事担当者が橋の銘盤を作成するとき、「僧殺し」橋ではあまりに殺伐・・とおもんばかり、音の似た「惣五郎」を当てたものと考えられる。このあたりは私の推量だが・・」

「″そうごろし″と″そうごろう″、一字違いですね」

「『僧殺し』の意味については、柴田勝家、佐久間盛政らの一向一揆衆との戦いで、政敵だった僧侶らの首級を、この街道沿いに曝したという説もある」

「むかしのことだから、口承にはいろんな尾ひれや変形がつきものということですか」

「事の真偽はともあれ、長くつたわる地名には、それ相応のイワレというか、その土地に住むひと達の記憶に残る歴史的な出来事が根底にあるのだろうから、一時的な好悪で、そうした伝承をとぎれさせてはいけないと思うよ」

「そんな深い意味があるなんて、思いもしなかった。篤（あつ）ちゃんの質問から、私が勉強させてもらったみたい！」

初秋の夕刻、川面からの涼しい風が二人を包んだ。二人のシルエットは長く伸び、川向こうの実った稲にまで達している。

（2009.8.18）

注1：太平寺のあゆみ
注2：野々市町史　集落編　−176−
注3：野々市町史　集落編　−153−

0002：徹通と大乗寺　太平寺・徹通荼毘の墓　>>場所： 　茶毘の墓謹告

東に延びる道が改良拡幅されたのを機に、太平寺の旧集落中央部に信号機が新たに据えられた。（平成 20 年1月）
これに先だって、旧道と新しい道との間にできた小さな広見に、祠が建てられている。

☆太平寺ホ 20 番地に「徹通和尚荼毘の墓」がある。高さ 67cm、幅 33cm、厚さ 24cm の自然石に大乗寺開山和尚荼毘墓と記される。町指定文化財☆［注1］

「徹通（てっつう）というのは、大乗寺の開祖とかいう・。長坂（金沢市）の大乗寺と何か関係があるんですか？」

「そこなんだ・、私もつい最近町の講座などで教えてもらったことから、大乗寺の沿革をかいつまむと」

☆弘長3(1263)年、富樫家尚が野々市村に真言宗の澄海を招聘して創建。弘安6(1283)年、曹洞宗の徹通義介を勧請し開山とする。
　その後二代螢山紹瑾、三代明峯素哲と受け継がれるが、室町時代末期の戦乱で焼失する。
　江戸期、前田家などの手で再建され、木新保（此花町）・本多町などをへて、元禄　10(1697)年に現在地長坂に移転した。☆［注2］

「野々市村なら、太平寺の地内に大乗寺はなかったということですか？」

「最盛期は、押野丸木から本町2丁目あたりにかなり広い寺域を持っていたらしいが、中世は史料が少ないのではっきりとは分からないようだ」

「ところで、荼毘(だび)は難しい字ですが、遺体を火葬した場所ということなんですか？」

「常識的には、そうだろう。昔は、薪や木炭で火葬したのだから、寺や人家から離れた処を選んだと考えられる」

☆『加賀大乗寺史』によれば太平寺ホ79番地が「ダビ」といい、大乗寺開山徹通を荼毘に伏した場所とされる。この付近は明治時代に開墾、その後の耕地整理で石碑の行方も不明だったが、館残翁の尽力で昭和2年に捜し出した。☆［注3］

移転前の荼毘の墓

「集落周辺の水田には、かって小字(こあざ) があり、太平寺のダビという呼称も、それにあたる」

「地名に残る歴史の記憶‥ですか、何丁目何番地では、地図で探すのは便利かもしれないが、先祖の記憶は語れませんね」

「ものには、長短がある。前にも言ったが、古くからの伝承は、きちんと後世代に伝えていくべきと思う」

「経済的に繁栄して、今は欲しいものはなんでも手に入るけれど、祖先のひと達の営みの上に、自分たちの生活があるってことですか」

「おっと忘れていた。堀内2丁目にも、大乗開山灰葬塚(はいそうづか)碑というものが残っており、大正時代に行なわれた耕地整理の工事で、太平寺との境川で見つかったと言われているようだ」

「似たようなものが二つも残されているというのは、徹通が‥」

「その頃の人達の崇敬を集め、忘れ難い人物だった証左ということかな」

二人の故知(こち)問答も、うまくハモったようです。
彼岸間近の入り日は、西の空に広がる雲を茜色に染めて、昔往と変わらず眩しく輝いている。

(2009.8.18)

0003：作善(さぜん)と経塚　　御経塚の経塚　　>>場所：

玄関のチャイムが鳴っている。

「こんちは・」

「おお、史(ふみ)ちゃん、ようこそ」

「この水仙、いい香り・・」

「屋敷（庭）に植えてあるものだ、今年は雪折れがなくて、きれいに咲いているよ。まあ上がって・」

しばし、近況の交換。

「この前の僧殺し街道の話をウチでしていたら、篤史が『御経塚の地名に経という漢字があるが、なにか坊さんと関係があるの？』と、思いがけない質問をしてきたんです」

「ほう・」

「それで町の図書館で、ちょっと調べてみました」

☆経塚は、もともと経典を永く後世に伝えるため、地中に埋めて塚にしたもので（中略）、戦国～江戸時代の頃には集落の安全などを祈願して、小さな川原石に経典の文字を一字ずつ書いた大量の墨書石(ぼくしょせき)を塚に埋める、礫石(れきせき)経塚というものが作られるようになった。
　御経塚の経塚はその頃のものでこれが町名の由来ともなっている☆[注1]

「あまり身近だと、集落名としての符丁になじみ、漢字に含められた意味まで考えようとしない」

「私もそうでした、また篤史に教わったみたい・」

「町史だと、そこまでなんだが、もう少し先があるのだよ」

「どんなことですか？」

「先だって読んだ本だが、ちょっと待ってて、いま持ってくるから・」

☆醍醐寺に出家して聖として活躍していた重源は、大陸から帰朝すると高野山の別所を中心にして勧進活動を行ないはじめた。西行・文覚など遁世の聖や別所の聖たちも勧進上人となり、作善のために「民庶」に働きかけるようになった。
　かれらは「民庶」の信仰を集める寺院や鐘・大仏の造営に関わるとともに、橋や道路港湾の修理・造築などの公共性の高い土木事業を精力的に行なっていったが、その作善の勧めのなかでも、直接に仏への結縁を勧める作善が広まり、なかでも念仏の作善を求めたのが法然である。（中略）
　広く仏への結縁を勧める作善には、持経・持仏・持戒の三つがあった。持経とは、経典そのものへの強

い信仰のことで、経を読む読経、経を書写する写経、経を経塚にうめる埋経などを行なって、経の功徳をたのんだ。☆［注2］

「町史での　☆集落の安全などを祈願して☆　のところと、この本の　☆埋経などを行なって、経の功徳をたのんだ☆　が結びつくと、意味がはっきり分かりますね」

「そこまでくれば、篤史くんを超えられたか・」

「うふ・、少しは親としてエバれるかも」

「これからは、私の推測になるが、聞いてくれるかな」

「ええ、よろこんで」

「御経塚の集落付近に十人川という川がある。御経塚や少し下流の森戸や松島あたりは、昭和の後期まで、雪解け水や梅雨時期にこの十人川の溢水が、時折ニュースで報じられていた。
また、倉庫精錬の工場用地などかっては沼田で、農作業に難儀していたとも聞いている。近くには荒屋という地名もある。
つまり、この辺りは手取川の氾濫原末端として、人力での制御が届きにくい土地柄だったと思える。」

「住宅団地や大型スーパーなどしか知らない者には、想像もできない・」

「3～40年くらい前まで、この付近に暮らすひと達の生計のなかで、農地は今とは比べものにならないくらい重いもの。
暴れ川の氾濫で、それまで農作物等に投入した労力が、一瞬にして無に帰してしまう。そんな無念を代々繰り返せば、中世や江戸期、神仏にすがろうとするのは理の当然。
暴れ川と、そこに住むらしい竜神を封じて欲しい、鎮めたまえと経を埋めた経塚が、この土地に残された・」

「なるほど・、治水事業がすすんだ近年では、前近代の遺物としか思えないけど、経塚を作った当時の地域住民には、神仏への必死の願いがこもっていたということですか・」

「これまで聞いたり、読んだりしたことを組み合わせたうえでの、私の推測だが・」

「おもしろい、と言ったら怒られるかも、でも、そんな風に考えると歴史がぐんと身近に感じられますね」

「もっと資料を集めないと、自信をもって語れないが、史ちゃんだからしゃべってしまった。まあ、あたらずとも遠からずだと思うがね」

「あら、もうこんな時間、長居しました。少し用事があるので、今日はこれで。また、お話聞かせて下さい」

（2009.8.18）

注1：町教育委員会編　「ののいち歴史探訪」-4-
注2：五味文彦著「中世文化の美と力」-80-

0004：道興の歌碑　　矢作・藤岡諏訪神社　　>>場所：

日毎に伸長する木々の若葉に、春の暖かい霧雨がけむるように降り注いでいる。

「いい雨ですね」

「晴天が続いて、埃ぽくなっていたから少し降ったほうがいいかも・・」

「先日、友だちのHさんから矢作の神社に石碑があるって聞いたのですが」

「ああ、参道脇にあるあれ。たしか聖護院道興（しょうごいんどうこう）の和歌が彫られているものだろう」

「聖護院って、京都ですか？　大根だか蕪菁（かぶら）で有名な・」

「そう、京都の粟田口にある中世の有力寺院で、近江から東海道へ通ずる街道の玄関口ともいえる所にある寺の一つだ」

文明 18 年（後土御門 1486）6月、道興は京都をたち、北陸から越後に入り、関東・駿河・甲斐を廻って陸奥にむかった。
途次の加賀では、小松本折から白山に登拝し矢矯（作）・野々市にいたる。その聖護院道興の紀行詩文集『廻国雑記』には、

> ☆こよひハ矢矯のさとといへる所にやと（宿）りけるに、暁の月をなか（眺）めて、
>
> こよひしも　矢はきの里に　　ゐてぞみる　　夏も末なる　弓張の月
>
> あくれハ野々市といへる所を過行けるに、村雨にあひ待て、
>
> 風をくる　一村雨に　虹きえて　　のの市人ハ　たちもをやます　☆

と記している。
［注］聖護院は天台系修験本山派の拠点。

当時の関白近衛　房の第三子として生まれた道興(1465～1501)は、幼時に出家し、のち山城国聖護院の 29 代門跡として、大僧正准三后まで昇った。
（野々市町史　資料編1-537-など参照）

「『廻国雑記』って、坊さんの旅行記とでもいうものですか？」

「そうだろうネ、私も町の郷土史関連の講座などを通して知ったのだが、この時代は戦国時代も近くて、郷土の記述

が現れる数少ない資料のひとつという」

「ここに抜粋文があるが、いぶり橋や本折など存問歌とでもいうのか、訪問先の地名を和歌の中に詠み込んでいる。矢はぎや野々市でも同じように地名を折り込んだ歌となっている」

「1486 年といえば、富樫政親が一向一揆勢に敗れたという 1488 年の二年前ですね」

「おっ、くわしいね。そこなんだが、当時の中央政権の中枢にちかい道興が守護職富樫の館に寄らず、直近の矢作に泊まっている」

「何か、わけありってこと」

「和歌もよく読むと、『夏もすえなる』とか『虹きえて』など、富樫の権勢の衰えを暗示しているともとれる」

「伯父さんの推理ですか？」

「矢はぎの『矢』と『弓張』もセットにすれば、矢を射るさまが見え一触即発の民情をうかがわす、とも読める」

「次の野々市での和歌も、意味がよく分からない『たちもをやます』なんかがあって・・」

「たちを『太刀』とか『館』といわゆる掛け詞と読んで、『風おくる』を組合わせると、近辺矢作をふくめ富樫の足下がただならぬ情勢にある」

「へえ―、五百年むかしが、急につい最近のことみたい！単なる紀行詩と読むか、政情視察こそこの旅の主な任務だったと考えるかの差ですか」

「この時代は、各所に関所が設けられ、今のように親書の秘密など無きにひとしい。関所での開封検閲を前提に、文や歌が綴られていると考えるのがふつうではないかな」

「いわれれば、そうですね」

「話が少し飛躍してしまったが、矢作の石碑も時代相を加味してながめると、興味が尽きない」

「ちょっと視点を変えると、すごく面白くなりますね」

眼をそとに転ずると、時雨模様の雨は止み、うす緑の若葉が微風にそよいでいる。姪と伯父とのわが町歴史探索、今回はここらで。

（2009.8.18）

石碑は、平成5年に町教育委員会が、道興の二句にあわせてそれぞれ矢作藤岡諏訪神社と本町布市神社に建立。

布市神社の聖護院道興歌碑：

0005：三林善四郎の館跡　　下林・定林寺　>>場所：

四月、野には近づく田植えに備えて農事にいそしむ人たちの姿が散見され、揚げ雲雀の鳴き声も耳に快い。

「このまえの石碑で思い出したのですが、下林の寺にも何かありましたね」

「定林寺の入り口にある『三林善四郎（みつばやしぜんしろう）　館址』の碑のことかな。私も平成のはじめ頃、次の文章に接してから少しづつ知識を貯えてきた」

☆『越登賀三州志故墟考』には、天正初めから、三林善四郎が石川郡林郷内の上林・中林・下林を押領し、三林氏を称して賊魁となったが、天正８年閏３月柴田勝家の加賀に侵入した時に滅ぼされたとあり、察するに、善四郎も林一族の一人であったと思われる。上林・中林・下林の三邑を拝領し、三林を名乗ったものと伝えられる。☆[注1]

「賊魁（ぞっかい）とは？」

「江戸期の記録であれば、前田藩の治世。戦いに勝利した織田側からみれば、敵対する（賊）の主たる人物という意味かな」

「上林とか下林というと、ああ　あの辺りかと言われますね」

「中世の林郷(はやしごう) の中心地域だった。善四郎については、町史にも次のような記述がある」

☆また、史料上では、当時加賀の一向一揆の拠点であった金沢御堂の御蔵衆の一人として軍を率い、南加賀まで進軍していた織田信長軍と交戦する三林善四郎の記録が確認できる。
　天正五年(1577)に能美郡の波佐谷城を拠点にした三林善四郎は、御幸塚に本陣をしく佐久間盛政と戦った。同八年の織田勢、柴田勝家軍の金沢御堂総攻撃に際しては、尾坂口の大手門で防戦にあたった。（掘五兵衛口上書写）
　この戦闘で金沢御堂は陥落し、三林善四郎も一揆方の残党として、討たれることになった。信長公記天正八年 11 月 17 日の条には、「加州の一揆歴々の者、所々にて手分けを申し付け、生害させ、頸ども安土へ進上、側松原西に懸け置かれ候なり」として、三林善四郎鳥越城主鈴木出羽守ら 19 人の首級が安土へ送られたことを伝えている☆[注2]

「一揆勢でも、かなり中心的な人物だったのですね」

「一向一揆には、地ざむらいというのか国人・国衆と称された有力農民も多く、善四郎もそうした家系の一人と考えられる」

「寺との関係は何でしょうか？」

「四百年以上もむかしのこと、善四郎とはストレートには結びつかないだろう」

「戦国時代の敗者側だと、古文書なども期待できない・・」

［とはいえ、地域の有力者であれば念仏道場の創建やその後の維持費にも、応分の負担はまぬがれない」

「道場と言ったのですか」

「定林寺は 1792 年に、僧円了が開いた[注3]とされるから、宗徒が集う建物が既にあったとすれば、真宗では道場と称した。ただ、本町に三林姓の僧侶がおられる、直系でなくとも何らかの縁があるかもしれぬ」

定林寺の門脇にボタンが一株あり、今年も見事な花をつけ、道行くひと達の眼を楽しませている。

（2009.8.18）

［注1］ 寺西艸骨著「林一族」-220-より
［注2］ 野々市町史 集落編 -151-より
［注3］ 太平寺のあゆみ 年表から

0006：道路元標碑　本町三丁目・本町児童館　>>場所：

初夏の季節、庭先や街路樹のヤマホウシ（山法師）が、白く清楚な花をつけて郭公の鳴き声を誘っている。

「この前、町の図書館で郷土関連の書棚に、『野々市町のいしぶみ』という薄い冊子を見つけました」

「ほう、石碑の話が続いたので、眼にとまったかな」

「ぱらぱらと見ただけですが、農事社跡とか富樫館跡など有名なものから土地区画整理事業など、つい近年のものまで様々ですが、『道路元標碑』というのに興味をそそられました」

☆ 明治六年、全国府県庁所在地の主要街道の交通要所に起点元標が建てられ、ここから県内の町村に至る距離が測定された。石川県の起点は、金沢市尾張町（橋場交差点付近）で標柱が建てられている。
旧野々市村の道路元標は大正九年当時の野々市村役場前のこの地に建てられた。☆［注1］

「本町児童館といえば、旧野々市の真中あたりになるかな。旧国道8号線が町並をさけ北側に移ってから、かっての商店街が次第にさびれてしまった」

「篤ちゃんと児童館に行ったこともありますが、道が狭くて自転車や歩行だと、ちょっと危ない感じだもの」

「江戸期の北国街道そのままの道幅だろうから、やむをえないのだろうが。今年から本町通りの一部で電線を地中に埋める無電柱化事業が始まっている」

☆北国街道は、近江国彦根に発して金沢、高岡、糸魚川を経て出羽国の西端、鼠ケ関を目指す。☆［注2］

「道路に面して土蔵があったり、郷土資料館や水毛生家など江戸時代を偲ばす建物が残っているので、少しは景観が良くなりそうですね」

「旧六日通の石碑も郷土資料館前にあり、片側だけでも歩道がつけば、近世の歴史遺産として、少しは他に誇れるようになるかもしれない」

「町役場は、布市神社うしろのものしか知らなかったのですが、現在三納の新館も含め3回も場所を変えているのですね」

「合併や人口増などによる行政業務の増大に対処するため、やむをえなかった・・」

「尾張町の道路元標が明治六年で、野々市の標識が 50 年もあとに作られたのは何故でしょう？」

「江戸時代、主要街道には松並木や一里塚があったようだが、案外それが里程標としてそのまま役立っていたのかもしれない」

「むかしは、金沢というより尾山と言うのが一般的だったように」

「たった一つの石碑からでも、いろんなことが思い出される」

「何気なく散歩に出たとき、新しい発見があるように、日頃見過ごしている処に、当時の記憶がこういう形で残っているのですね」

「これが、わが町歴史探索・」

伯父と姪、ふたりの眼差しに充足感がただよう。梢の葉を揺らすそよ風が、さわやかに窓から吹き込んでいる。

（2009.8.18）

[注1]野々市町のいしぶみ -2-より
[注2]週間日本の街道 51　講談社　-4-より

0007：弁慶の力石　本町・布市神社　>>場所：

雨滴が窓ガラスをつたって、つっーと滑り落ちる。一滴また一滴と。外出さきから帰宅した訪古さん。

「やあ、篤志くん来てたか」

「こんにちは」

「ずいぶん、背がのびたようだな」

「あと少しで、追いつかれそう。あっちゃん、伯父さんにこの前の話聞いたら・」

「うん、友だちが布市神社に弁慶が投げ飛ばした石があるって、昔話しをお婆ちゃんから聞いたって・・」

「そうか、弁慶の力石のことだな」

「それって大きいの？」

「ここに写真があるが、むかしは若い衆の力くらべに使われていた盤持ち石の一つだ」

「盤持ち石って？」

「昭和 30 年代以降、世の中の変化が激しいので、忘れられないよう記録に残した人たちがいる」

☆全く忘れられた風俗に、バンブチ（盤持ち）がある。米俵や石を担ぐ力競べの風俗で、40 年前(1950)ころまで各地で行なわれていた。
バンブチは、単に力競べという意味だけではなく、若者社会への仲間入りの儀式としての意義をもっていた。
農村で暮らすには、物を担ぐ能力は欠かせないが、いくら力があっても、それだけでは米俵などを担ぐことはできない。
担ぐにはコツがあり、そのコツを体に覚えさす訓練の場がバンブチだった☆[注 1]

「今なら、バーベルというわけ・・」

「うまいこと言うね」

☆バンブチは、どの集落でも行なわれていた。しかし、現在バンブチ石の残っている町は少なく、八町 17～19 箇である☆［注2］

「さしずめ、神社境内での、娯楽をかねた鍛練会かな」

「ただ、力石や盤持ち石というよりは、怪力無双と言われた弁慶との力比べと思えば、挑戦する方もファイトが湧く」

☆本町のバンブチ石は、弁慶が野々市を訪れた際に、富樫館から若松町の、通称「チカライシ」まで投げ飛ばしたと伝えられている。また、旱魃のとき担ぎ回ると、必ず雨が降るといい、「雨ごい石」ともいわれている、との聞き書きがある☆［注3］

「山伏が山中での連絡に法螺貝を使ったというが、弁慶が山伏すがたで、こんな大石を投げ飛ばしたなど、おおボラ（法螺）吹きもいいところ・」

「ワー、伯父さんホームラン。（笑い）そう言えば、弁慶の力餅というのもあったっけ」

「力モチって、食べるおモチのこと？」

「そう、農家が自宅で餅つきをしたとき、つきたてのあったかい餅を千切って大根おろしをまぶして食べる」

「わたしも子供の頃、ふうふう吹きながら食べたけれど、おいしかった。この子らが力持ちになって欲しいとの願いもこめて、単に、力餅というより弁慶の力餅というと、意味が強まり語呂も良いですね」

「類似の発想から、誰かが口にしたのが始まりだろうが、伝承の間に、話としてのおもしろさおかしさも加味されていった」

「その当時の民衆が抱いていた心情が、ひとつの石の名前に残っているのですね」

窓のそとに目を転ずると、盛夏を思わせた前日の暑さから一転、昼すぎから、降りだしたこぬか雨が、庭先の木々の若葉をしっぽり濡らしている。

布市神社の鳥居

（2009.9.1）

［注1～3］ 中島康男「野々市文化」8号 −37−

0008：**薬師如来の額**　下林・薬師日吉神社　>>場所：

６月中旬、梅雨入り宣言がニュースで流れた。曇り空だと、ヤマセが吹くと少し肌寒いが、晴れると２３～５度くらいの気温となって、同じ風が心地よく感じられる。

「少し暑くなってきましたね」

「今朝はカッコウが鳴いていたようだ」

「伯父さん、作家の五木寛之を知ってます？」

「もちろん、私の若いころは人気作家で、『蒼ざめた馬をみよ』や『さらばモスクワ愚連隊』などを読んだ。音楽シーンの描写が印象に残っているよ」

「この間、彼の『百寺巡礼』という本に、次のような文章がありました」

> ☆比叡の山をめぐる千日回峰行、基本的には東塔、西塔、横川の三つの地区を参り、その足で尾根道伝いに山をおりて、日吉大社にお参りするという（中略）日吉大社は比叡山の氏神である。☆[注 1]

「日吉社と延暦寺、回峰行に神仏習合的要素が残っているということだろう」

「明治に神仏分離令が出されたと、歴史で習ったけど、何かちがうみたい・・」

「ここ十数年来、わたしもまわりの習俗は、神仏習合という視点でみた方が腑に落ちることが多い、と思うようになった」

> ☆『古事記』に「大山咋神は日枝山(ひえのやま)に座(いま)す」とあるが日吉大社の創紀の起源といい、霊峰比叡山の東の麓に鎮座する祭神はもともと比叡山の地主神だった。
> 古くは「日枝」「稗叡」「比叡」と書いて「ヒエ」と読んだが、平安末期ごろから「ヒヨシ」と読むようになったらしい。全国に 3800 社余りの末社がある☆[注 2]

「今年から、集落の神社世話役に加わったが、下林の神社もその末社のひとつだろう」

「京都や小松にも、日枝神社がありましたね」

「読みが同じ頃は、同系と分ったけれどいまは歴史的な知識がないとね・。また薬師如来だが、平家物語などによれば山王権現として広く世間に伝わっていたようだ」

> ☆陰暦四月の中の甲(さる)の日は、薬師如来が衆生を済度するため山王権現となって日本に迹を垂れた日とされる☆[注 3]

「下林の神社舞殿には、薬師如来という文字だけの掲額(写真)があるが、金箔（金泥？）文字のハゲぐあいから、年代もののようだ」[注 4]

「薬師如来は仏さんですよね。明治の分離令以前のものが、廃仏毀釈をまぬがれてきた」

「また、社地の湧水伝承が昔噺として下林に残っているが、これも次のような記事がある」

> ☆四国八十八札所のうち、二十三ケ寺の霊場の本尊は、人々の病苦を除き、安楽を与えると信じられてきた薬師如来像で、そのいずれにも湧水・清泉伝説がのこされている☆[注 1]

「重い病気に苦しむ人が、かっては神仏にすがるしかなかった。その反映ですか？」

「下林の神社由緒にも、山王社や湧水伝説など、似たようなキーワードが出てる。長い伝承のあいだに、日吉大社と末社の話の区別がつかなくなったのだろう」

「言わば、地域固有の言い伝えに中央からの風聞がまぶされて、有り難みが強調された」

「まあ、いつの世にもあること。目くじらをたてる必要もないが、由緒に記されたものを無条件に信じるのはどうか・・」

薬師日吉神社の狛犬スケッチ[注5]

（2009.9.20）

[注1]五木寛之著「百寺巡礼4」 -76-
[注2]瓜生　中著「古寺社巡りの愉しみ」 -118-
[注3]平家物語　訳注 -241-
[注4]野々市町史　集落編 -154-
[注5]野々市の狛犬（垣之内安彦）より

0009：夢のお告げ　徳用・光松八幡神社　>>場所：

「このあいだの神社の話を夕飯のとき話題にしたら、あっちゃんが『町に神社は幾つあるの？』と質問してきたんです」

「改めて聞かれると、即答できないもの。私も『昔を語る会』などに出席したりして少しづつ知識を増やしてきたが、町史に明治39年に出された神社合祀令後の変遷を記した一覧表[注 1]があり、45社が27社にまで整理統合された・と記されている」

「平成の大合併は市町村、明治は神社の合祀だった」

「上手い例えだな！。いつの世も、中央政府のやることは荒っぽい・。それはともかく、町内27社の中でも、徳用の八幡神社はその由緒が珍しい」

「徳用を『とくもと』と読むのは、変わってますね」

「矢作もそうだが、町外の人には簡単に読めない。ここに、町の歴史ガイド的な小冊子がある」

☆松任城主鏑木氏の一族で、塚田徳用(とくもと)が居住していた所で、後に田中村から分村したときにその名を採ったとされる☆[注 2]

「ののいち検定の問題に使えそう（笑）ところで、神社の由緒って？」

☆徳用村肝煎（村長）の仕平の夢に、金沢城内の神様が現れ「徳用村へ行きたい」とのお告げがあり、打ち首覚悟で金沢の金谷御殿へ行き譲り受けの願いをしたところ、殿様も同じ夢をご覧になっていたという。
村民らの熱心な嘆願がみのり、旧藩主前田斉泰が信仰してきた神が一農村の神社に納められた☆[注 3]

「たしかに、珍しい話ですね」

「史ちゃんの学生時代に戻って、明治4年というと・・」

「歴史の問題ですか？。神仏分離令が明治元年・。4年は・・、そうだ廃藩置県が施行された年ですね」

「その通り。地方の出来事も、全国的な流れの影響を免れない」

「村長（むらおさ）の嘆願は、明治4年8月と記されていますね」

「廃藩置県が明治4年7月、村からの嘆願が同年8月となっている。まさに、時勢を巧みに利用した村長の行動と言えないか？」

「なるほど・、激変する世を象徴するエピソードの一つだった、と解釈できるわけ！」

☆金谷御殿の八幡宮は、江戸でも有名な穴八幡神社の分神が祀られたもの。三代将軍家光をはじめとして、加賀藩三代藩主の前田利常の崇敬も篤く、その後加賀藩において分神を願ったものと思われます。☆

「江戸から金沢、そして金沢から徳用と分神が繰り返された。その辺の事情を物語る資料が、神社に残されていた」

「町が指定した文化財のなかでも、藩主斉泰が幼少の頃に書いたとされる猿の絵など、ほほえましいわ」

「由緒書きといえば、後世の潤色が多く、事実をあまり伝えていないものが一般的なケース。徳用のばあいは、年代的な近さもあって、物的資料が豊富に残されているのが貴重！」

屋敷地にケヤキや杉などを植えて、家を建て替える際に利用するのが農家の経済・と子供のころ耳にした。だが、昭和30 年ころを境に、それらの木々は徐々に姿を消し、農村集落で目につく樹木は、今では、神社地のものが主になってしまった。

光松八幡神社の神号額

（2009.10.13）

[注1]図説　野々市町の歴史　－108－
[注2]ののいち歴史探訪　－18－
[注3]ののいち歴史探訪　－13－

0010：厨子の狐　三納・日下日吉神社　>>場所：

平成19年、三納の日下日吉神社が新しく築くりなおされ、十月に竣工・慶賀祭が催された。

「太平寺の社殿も、つい最近では？」

「堀内のも新築して十年たっていない。いずれも、億を超える費用だったようだ」

「新しいものは気分がいいけど、まとめ役のご苦労は並大抵ではなかった・・」

「賛同者がいなければ、誰にも務まらないよ」

「農村部の精神的なきずなの、ひとつの象徴！でしょうか」

「ところで、町の文化財に指定されている厨子の修理で、新しい事実がみつかったという」

「何かしら？」

「傷みが激しいので、京都の専門家に依頼したところ、扉に狐の姿が現れた」

「狐ですか」

「かっては描かれていたものが、何かの事情で塗りつぶされていたらしい」

「ご神体をおさめる厨子に、狐の絵・・。ミステリアスですね」

「厨子は江戸末期のものと推定されているから・・」

「やはり、明治の神仏分離令のあおりだったのでしょうか？」

「簡単に決めらつけれないが、集落では皆で相談のうえ、そのまま復元しようということになった」

「それが、この写真ですか？」

「狐が描かれていた謎をとく鍵が、実はここにある。集落に伝わる『きつねやぶ』[注1]の口承だ。Aさんの聞き書きの労作だが、読んでみる・・」

「ひとと狐の共生談。なんとも微笑ましいわ。篤ちゃんにも読ませたい～」

「多少の悪さはしても、鼠やモグラを駆除してくれるから、狐を追い払わない」

「エコ、エコと、最近は環境問題がやかましいけど、昔のひと達にはちゃんとわかっていたんだわ」

「先人のほうが複眼的で、物事の尺度が一方にかたよらない」

「生活の知恵でしょうね。しかも子供でも解かる物語で、代々伝えてきた」

「はなしの中に『おおみち』が出てくるが、野々市から鶴来への往還を、かって『白山大道』と称していたが、それでも野狐が出没するレベル・・」

「民話にも、歴史のヒントが埋もれているってことですか？」

「それはさておき、厨子は、一般的には仏像を納めるもの。それが、この神社ではご神体を蔵している」

☆石造山王権現神像は、側面に寛延4(1751)年8月 20 日銘がある。山王権現大山咋神を束帯姿で表現しており、神仏習合を表わす貴重な歴史資料だといえます。[注2]☆

「神仏一体という視点であれば、違和感などはなかった」

「地名の三納も、山王社（日枝神社の別称）があったことから『山王村』とも記したようだ」[注3]

「そうなんだ！　三納に納得～（笑）」

☆「習合して千年、分離して百年。民衆の隅々にまで浸透した習合が、たった一つの命令で分離出来るわけがない・・」　（春山景樹の述懐）☆

「神社は神道。宗教学的にはそういうのだろうが、産土神(うぶすな)や鎮守神はむしろ習俗的にとらえた方が分かりやすいようだ」

「歴史というと、すぐ古くさいなどと敬遠しがちですが、伯父さんみたいに身近なところから入ってゆくと、次々と興味が湧いてきますね」

修復された厨子の外観

（2009.10.26）

[注1]私家版「きつねやぶものがたり」
[注2]ののいち歴史探訪 -56-
[注3]ののいち歴史探訪 -57-

0011：絵馬と石燈籠　粟田・豊田日吉神社　>>場所：

季節はめぐり、早くもケヤキやアメリカ楓などの街路樹が彩りも鮮やかな衣をつけ、錦秋の候を演出しはじめている。

「神社の話が続いたのですが、初詣でのとき、絵馬を見た篤ちゃんから『どうしてあんなことするの？』と尋ねられたことがありました」

「ああ、間近に迫った入学試験にむけて、受験生が合格を祈願して掛けた絵馬のことかな・」

「若いひとの恋愛成就や、家内安全などもありますね」

「それで、史ちゃんはどう答えたの・」

「神様に何かお願いするとき、神前で手を合わせるが、その望みをより強く表現すること・・じゃないかなと」

「神様でも、大勢の願いをいちいち覚えていられない・(笑) 日頃の習慣的行為を改めて尋ねられると、答えに詰まるものだね」

「境内のはミニチュアですが、近隣の神社にも、絵馬というのか掲額が、拝殿の鴨居などに飾られていますね」

「絵馬という言葉のとおり、本来は神の使いとされる白馬を描いて奉納したものだろうが、年代が下るにつれ、『翁(おきな)と媼(おうな)』図や雉子(きじ)図などのバリエーションが生まれたと思える」

「海に生業を託す人達は、航海の安全を祈願する船の絵を、武者図だと戦勝を祈る武人が掲げたものでしょうか？」

「当町にある神社の絵馬についての調査のコピーがここにある」

☆各集落の神社には、古い絵馬が沢山残されている。そのうち年代のはっきりしているものは 14 点で、1845～64 年ころのものが多い(要約)☆[注1]

繋馬図 天保4年8月(1833)

「粟田の繋馬(けいま)図は180年も前のものとは思えないくらい鮮明ですね、白い馬でいかにも神々しい感じで・」

「社の杜とともに、境内入り口の鳥居や参道脇の狛犬(こまいぬ)や燈籠(とうろう)なども神域の印象を深めてくれる。豊田日吉神社の石燈籠は、写真の絵馬よりもっと年代を遡る」

☆元禄8(1695)年の寄進とあり、紀年銘のある石燈籠で、県内では金沢市小坂神社にあるものについで二番目に古い☆[注2]

石燈籠の間で演じられる獅子舞

「狛犬は、子供のころこわごわ見ながらも、何という動物か？と疑問を持ったことを思い出すわ」

「ライオンが原形なのだろうが、唐からの伝播の間に想像上の姿態が加わったものとされる」[注3]

「徳用の神社のときに、参考にした一覧表に村社とか無格社とかがありましたね」

「私もずっとその意味が掴めていなかったのだが、近年手頃な資料が見つかった」

☆神社の格付けを「社格」という。社格の起源は八世紀以降だが、江戸時代にすっかり廃れていた社格制度を立て直すため、明治政府は 1841 年太政官布告を発した。これにより、伊勢神宮を頂点に官幣社と国幣社を選定し、それ以外の諸社には府県社・郷社・村社・無格社が含まれていた（要約）☆[注4]

「町内の神社のほとんどは村社だが、上林の林郷八幡神社だけは、ワンランク上の『郷社』とされた」

「中世に勢力をもっていたという林一族の氏神的な位置にあったという意味を持つのかしら」

「中央の政権との関係がうすくなっても、この地では、手取川の荒れ地を開墾した豪族として、それなりの勢威を維持していたのかもしれない・」

「文献に現れない歴史の一端を、『郷社』の称号が示していると・・。伯父さん一流の推量ですか（笑）」

（2009.11.13）

[注1]中島康男報告「野々市の文化」1号　-19-
[注2]「ののいち歴史探訪」 -62-
[注3]たくき　よしみつ著「狛犬かがみ」
[注4]週刊「神社紀行」No40　-33-　学研社

0012:閑話休題　1

このシリーズ冒頭の「僧殺し街道」にちなむ話題を紹介しよう。

暗殺者の小道

リオ・テッラ・デリ・アサッシーニ（暗殺者の小道）という物騒な道の名前がある。ここにかかる橋に、かって「暗殺者の橋」という名がついていたため、地名として残ったという。

古い時代、ヴェネツィアでは夜間をねらって殺し屋が暗躍した。正体を隠すため、偽の髭（ひげ）がよく用いられた。そこで政府は 1128 年に、こうした髭を禁じ、夜間の照明に気を配るようになったという。
（陣内秀信著「迷宮都市ヴェネツィアを歩く」より）

「薬師如来の額」や「厨子の狐」などで話題になった神仏習合の西洋版ともいえる文章に、つい最近出会った。

合金のような混合体

しかし支配権力の言説は、そのまま現実のありようとイコールではない。農村の生活世界のなかで、一年に区切りとリズムを与えていたさまざまな祭りを、とってみればよい。

ほとんどすべての祭りは、キリスト教をも含んだ諸成層からなるものとして、いわば「合金」のような混成体であった。一例として６月２４日に行なわれた聖ヨハネ祭という祭りがある。パブステマのヨハネの名が冠せられているように、この祭礼はキリスト教暦の祭礼である。しかしその前夜に、多くの地域で行なわれた火祭りの慣行は、それじたいとしてはキリスト教的なものはまったくない。作物の豊饒（ほうじょう）や、男女の結合と共同体の繁栄が祈られ、あるいは清めの火や煙に体をさらして、健康が祈られた。

聖なる日に男女が騒ぐのはけしからんと、１７世紀後半のある文書は、火の周りでの踊りを断罪する。しかしそれが有効でなかったことは、のちの民俗研究家たちの報告が証明している。
（福井憲彦著「『新しい歴史学』とは何か」-54-）

「神仏習合」は、日本独特の仏教受容の形態などと、長らく信じさせられてきた。だが、上述の引用文を読むと、洋の東西を問わず民衆の宗教への反応には同じようなところがあるのだと、あらためて気づかされる。

（2009.11.13）

0013：献穀田・お田植え式

日に日に緑の濃さを増した水稲が、目に鮮やかだ。その葉色がすこし浅緑を呈しはじめる六月中旬、穂肥を施す時期となる。

☆去る（平成8年）5月21日、中野茂信さん（三納）方で、献穀田のお田植式が行なわれた。五月のさわやかな風が頬をなでる中、しめ縄をめぐらした田で、緋色のたすきに紺かすりの乙女達が一株づつ、ていねいに苗を植えた☆ ［注1］

「今でこそ、当町は縦横に道が走って便利になったが、昭和40年ころまでは本町地区をのぞけば、水田が一面にひろがる純農村地帯だった」

「当然、多くの町民の生活基盤は、農業に依存していたわけですね」

「若い人から徐々に兼業化がすすんでいたが、中高年層はまだ農業経営に誇りを持っていた」

「献穀って、穀物を献上するという意味ですか？」

「そう、皇室への献上で、古くからのしきたりに基づくようだ・」

「中野さんでは田植えだから、お米ですよね」

「全国では、粟や黍(きび)など他の穀物もあるという。この頃は石川県では、加賀・能登地区から各一戸選ばれていた」

☆化学肥料や除草剤などの農薬が使用出来ない制約の中で、10月末に中野さんは無事皇居で献穀を終えられた。富奥地区では、中島栄治（2）・村上弥三郎・小林考次各氏についで、五回目の栄誉である☆ ［注2］

「農薬が使えないと、草取りなども大変だった？」

「肥料も油粕や米糠・大豆粕などの有機肥料、収穫後も乾燥機ではなく天日干しなど在来農法というか、むかし流の作業に近い形がとられたという」［注3］

「選ばれること自体が名誉なんでしょ・富奥地区だけで5件とは、やはり米どころと見なされていた？」

「昭和20～30年代は、石川農業の中核的地域と自負していたようだ。昭和30年代にかぎっても、33年（1958）

収量を競う米作日本一において、石川県一位の中野喜佐男氏を筆頭に、中山武次・田中勝治・木林光一・松村功らの各氏が、県内トップクラスの成績をあげ、あいついで表彰を受けている」［注4］

「そのころの面影は、西南部の一部地域に見られるだけですか？」

「いまでは石碑だけが残る県農業試験場や県立農業短大（現県立大学の前身）の設置でも、そうした地域的特性が誘致条件のひとつだったと思うよ」

「石川農業の中核地域から、わずか数十年で県内屈指の商業集積地域へと変貌・」

「50年前も歴史の一環、忘れさられないよう今のうちに、郷や押野地区をふくめて、こうした記録を集約しておきたい・」

「伯父さん、ますます忙しくなる」（笑）

その年の天候により、3～4日の違いだが、肥料の施用量やタイミングの巧拙が、秋の収穫時の明暗となる故、この時期、朝夕の葉色観察が欠かせない。

【献穀田へお田植え式に向かう一行】

（2009.12.7）

［注1］JAとみおく37号より
［注2］TOMIOKU（富奥農協創立50周年記念誌）-59-
野々市町史　-179-（昭和 14 年の写真）
［注3］JAとみおく39号参照
［注4］富奥郷土史　-1241-参照

0014：品種育成に心血そそぐ　「大場」～「コシヒカリ」

農用地が、かっての半分位に減少したとはいえ、今でも当町の農地は水稲作が中心だ。

「今年のコメの出来はやや不良、とニュースで見ましたが、伯父さんとこは？」

「石川県は、加賀・能登と分けて発表され、加賀の作況指数は98。私の処もこの数値に近かった」

「伯父さんが作っているのは、コシヒカリですか」

「おもにコシヒカリだが、家で刈り取りから籾摺りまでこなすので、一部『ゆめみずほ』という、少し早く刈れる品種も作ってるよ」

「スーパーに行くと、いろんな種類がありますが、コシヒカリはいつ頃から栽培されるようになったのですか？」

「私が30代なかばの頃、農協青年部がその導入のさきがけとなって、競作会などをしていたから・」

「30年くらいも前だと、わたしは小学校に入る前後・」

「ちょっと待って、コシヒカリ誕生のいきさつを記した新聞のスクラップがあるはず・」（しばし書斎へ）

【保温折衷苗代（昭和20年代）】

☆昭和22年から、農林省福井農事実験所でイネの品種育成に取り組んでいた石墨慶一郎さん。
当時、農林1号という品種があった。味が良くて収量も多いが、いもち病に弱い。いもち病に強い農林22号と掛け合わせれば両親をしのぐ子供ができるのでは。そう考えた。
連日のように試験田に出たが、結果が出るのは年に一回。昭和30年、やっと優れた子ホウネンワセ（豊年早稲）が誕生した。名のとおり、収量は親をしのぎ、早く収穫できるので、台風シーズンを避けられる。倒れにくく、病気にも強い。
「期待以上の優等生ができたんだから、同じ両親の育種は打ち切るところ。でも、熟した姿が美しくて、捨てるには惜しい妹がいたんです」
それが、翌年育成されたコシヒカリだった。
「越の国に光り輝くコメに」との思いをこめた名は、最初に奨励品種に決めた新潟県（越後）が、生まれ故郷（越前）にも気を使っての命名だった。☆［注1］

「交配による育種なんでしょうが、『姿が美しい妹』などと、石墨技師の言い方がいいわ・」

「八年間もの丹精の結果だから、捨てるにしのび難かったのだろう。だが、兄貴分のホウネンワセに比べ、食味が品種の判断に大きな比重をしめる昭和50年代まで、まさに雌伏20年でもあった」

【ビニール畑苗代（昭和30年代）】

☆昭和8年7月中旬のある日、穂ばらみ期で青々とした「農林一号」のたんぼに、ぽつんと穂を出している稲株を、田まわりをしていた米丸村保古（現金沢市保古）の辻興三郎が見つけた。（中略）
近所の永井幸作に相談したところ、当時、21歳で研究熱心な永井はこの稲を見て、直感的にこれが野菜栽培のためになる稲であると思い、八月の盆過ぎ、大切に抜き取った。それから数年間、苦労して選抜を繰り返し、ようやく固定した品種として栽培できるようになった。「農林一号」より一週間も早く収穫できるので「早農林」と名付けられた。
永井の着眼はすばらしく、「早農林」はその後、金沢平野全域に急速に普及してゆき、昭和30年、県内での栽培面積率は9％余に達している。昭和24年には、石川県の認定品種とされ、「加賀みのり」が出現する昭和34年まで、水田裏作の白菜や大根栽培のための、重要な品種として活躍した。☆［注2］

「さきの人為的な交配と違い、自然に発生したものからの選抜という方法だよ」

☆嘉永六(1853)年の六月十九日（旧暦）の朝、水田を見回っていた西川吉平は、水稲品種「巾着」(きんちゃく)の中に、籾についている芒(とげ)が無い、粒の揃った一穂を発見した。吉平はこれを三年がかりで増やして水田一枚に作付できるようにした。
この新品種は「吉平坊主」と言われていたが、後に地名をとって「大場坊主」または「大場」と呼ばれた。
従来の品種にくらべ耐肥性の強いこの品種は、明治十年代から普及されたれんげ草とも結びついて作付が増大し、大正八年には本県の水田面積の36％をしめるまでになった。昭和7年まで、奨励品種とされ、藩政末期からの長期間本県の米つくりに貢献してきた。☆　［注3］

「画期的な事例のみピックアップしたが、この周辺には、似たような農民が沢山居ての結果だと思う」

「普段、なにげなく食べているご飯。じつは、先人たちの知恵の産物なのですね」

「いく世代にもわたる、品種改良へのたゆみない努力の積み重ね。これぞ『稲作文化の中核』と言っても過言ではないだろう」

（2010.1.5）

[注1]朝日新聞　S62-8-22　お米はどうなるか-5-より
[注2]中島康雄　「石川の農村を支えた人びと」-76-要約
[注3]宮森久男　　”　　-81-要約

0015:村御印

「この前、PTAの会合で友達のKさんとの話で、そこの神社に『村御印(むらごいん)』とかいう町指定の文化財があると聞きました」

「江戸時代の加賀藩のものだろ」

「ご印って、印鑑のようなもの？」

「言葉からすると、そう考えたくなるが、藩から村むらへ下された文書で、いまでいえば、納税通知書にあたるかな・。ここに写真がある」

【野々市村村御印】

☆「村御印」は、「加賀石川郡〇〇村物成之事」という見出しに始まり、壱ケ村草高(くさだか)‥と前提条件のような記述のあとに、「一　七百九拾四石」「免六ッ三歩」などと記されている。草高とは、当時の標準収穫量であり、免(めん)六ッ三歩は、その 63%を納付すべしという達しである(中略)
　税の中心は米だが、「小物成(こものなり)」といって、山役や外海船櫂役(かいえき)さらに炭役・葭役(あしえき)など、藩全体では、60 種類近くの物産に対し相応の賦課があった。☆[注1]

「写真だと、そっけない感じ」

「文化財という語感からは、少し違和感がないでもない。江戸期の公文書としての史料的な価値からの選定なのだろう」

☆また、「村御印」の左下部に「〇〇村百姓中」と宛名書きされ、書面の物成は村落に 30 戸あれば、その 30 戸全体に課せられたものであり、一戸でも未達があれば、他のメンバーが連帯責任を負わされた。それ故、村人達の大事な相談ごとの際には、この「村御印」を前に置いて、決め事に背馳(はいち)することが無いよう誓約したという☆

「お上からの達しであるぞ、神妙にお受けいたせ‥的。時代劇のシーンみたいね」

「町の広報『野々市の文化財』シリーズや、町史編纂にともなう編纂委員らの公開講座などから、こうした史的な意義を教えられた」

「資料だけでは、そこが分からない。口承が加わって、当時の人たちの受けとめ方が理解できるってことですね」

「当時は、村落のまとめ役庄屋などの家に保管されていたのだろうが、明治新政府になって文書はホゴと化した。」

「竹籠や箪笥の奥にしまい込まれ、時が移るとその意味さえ分からなくなり、数代まえの人々の生活実感が、ぷっつりと途切れてしまう」

「そこが埋まれば、歴史がもっと身近なものになるのだが・」

「一片の紙切れでも、伯父さんと話してると、想像がひろがり、おもしろくなってくるわ」

「少し退屈な話になったかな、と思ったが、そう言ってくれれば張り合いがあるよ」

「Kさんがどのくらい知っているか、検定してみようかな」（笑い）

「話を戻すと、藩からの文書だから、そこには加賀藩の財政や政情が深くからまっていた」

☆寛永 13 年（1836） ごろから、危機にあった農村では、18～9 年の全国的凶作によりいよいよ荒廃し、農民の貧窮・家臣の困窮という事態を解決しなければならなかった。（中略）明暦２年(1656)に成就した農政大改革［改作法（かいさほう）］は、その根本的な解決策であった。☆［注２］

「米が取れなければ、経済もふるわない。経済はいつの時代も、政治の最重要課題ですね」

「改作法に基づいてだされた「村御印」だから、参考資料として示すだけ。これ以上は専門的な話になるから、今日はこれくらいにしようか」

初秋の日差しに黄ばみだした稲穂を背に、農道わきのミゾソバ（招来ばな）の紅紫の花が鮮やかなコントラストをみせている。花に近づくと、蜂や蝶が蜜を求めて飛び交っている。

（2010.2.8）

【下林村村御印の解説】

［注１］村田裕子氏の講演要旨（町史編纂事業）より
［注２］若林喜三郎監修 「石川県の歴史」-129-

0016：先人からの遺産　農事社と耕地整理　>>場所：

「農業といえば、何か大きな石碑が町内にありましたね」

「住吉町にある『農事社跡』のことだろう」

☆かって、（旧）野々市町住民の大半は農業にすべてをかけた。その熱意の結晶が明治 9 年（1876）に設立された農事社。明治初年、東京学農社で近代農法を学んだ加賀藩士の杉江秀直が恩師の渡邊譲三郎と協力して設立したもの。明治 20 年、農事社は模範農場と改称され、田区改正を行った。この田区改正こそわが国初の耕地整理だった。☆［注1］

「今から百年以上前とはいえ、わが国最初とは・」

「この記事にあるように、昭和 43 年に明治百年を記念して、この碑は旧町農民の手で建立された」

☆県内では石川郡長の安達敬之が耕地整理に熱心で、その勧奨に同郡上安原村（現金沢市）の高多久兵衛が応じ、石川式田区改正と称される方式を編み出して、村単位の耕地整理を全国に先駆けて実施した。☆［注2］

「この辺では、いつごろ、いまのような水田の姿になったのですか」

「私も昭和生まれでして・・（笑）。野々市町史の集落編に各集落での工事着工や終了時期が書かれており、今の町域では明治43・4年から大正8・9年にかけて一斉に行われているようだ」

「身近なところで手本を示されても、すぐに実行したわけではないんですね」

☆石川郡においては、明治42年9月皇太子殿下（大正天皇）の北陸行啓を記念とし松任、笠間駅間の鉄道沿線一帯に耕地整理事業を着手し、その後大正全期にわたり、手取扇状平野の大半1万1千ヘクタールの面積を完成した。（中略）当時の実情をみると、みぞれやあられの降る冬期間の服装は、頭巾もかむらず、肌着のメリヤスもまだ現れず、バットあるいはボットといわれるつづれを着、下は紺木綿で作ったももひきをはき、足にわらで編んだ脚絆を着け、わらじ履きで手は手袋を着けるのが大恥とされ、素手であった。雨や雪が降っても、笠とわらで編んだ、みの姿で黙々と働いたのである。☆［注3］

「その頃の人たちの、胸の痛むような仕事ぶりが目に浮かびますね」

「昭和生まれは、いまの整然とした田ん圃しか知らないが、この間ふと手にした本に格好の文章を見つけた。著者は、おとなり白山市山島生まれの方だよ」

☆大正４年生まれの私は、大正中期の耕地整理事業が行われる以前の石川平野の情景を朧気（おぼろげ）ながら記憶している。水田耕地に大きな段差があって、少し登り坂の土手に毎年紫色の小さな花が群れ咲いていた。丸石を積んだ狐島は怖かったけれど、野イチゴに誘われて、こわごわ近寄ったら、石の上に大きな蛇が這っていたり、イタドリを齧（かじ）ったり、桑の実を摘んだり、野は幼い頃の毎日の遊び場だった。（中略）土手が崩され、新しい水路が出来て、耕地整理が終わって、一望に見渡せるように変わったのが大正末期だった。曲がりくねったあぜ道が広い真っ直ぐな農道となり、コンクリートの橋が架けられた。あぜ道をゆさゆさ重そうに背負って運んだ稲や野菜が、荷車で楽々と取り込まれるように変わり、作業能率は急速に上がった。☆［注４］

「幼少時の風景を、懐かしむ心情が滲む文ですね」

「それと同時に、その時代に生きた方にしか出来ない貴重な証言だろうね。こういう文章があってこそ、時代の推移が分かるんだよな・」

「ほんと、眼の前の当たり前と思っていた光景のうらに、数知れぬ先人たちの労苦が詰まっていた」

「そんな礎のうえに、私たちの生活が成り立っていることを、つい忘れがちになってしまう。心しないとね」

眠っていても感ずる稲光、しばらく間を置いて体をつき動かすような雷鳴が轟く。そして、ひゅうひゅう吹きすさぶ風が，雪のちかいことを知らせている。人は日々の天候に一喜一憂するが、先人からの遺産とともに、この季節の降雪あればこそ、稲作が成り立っていることをも忘れてはならない。

（2010.3.4）

［注１］北国新聞 ‘75－7－25「ふるさとピンナップ」より
［注２］図説　野々市の歴史　－102－
［注３］石川の米づくりとむら　－44－
［注４］森田昌子著「大慶寺物語り」－29－

0017:**移動班**　早場米地帯

「このまえ、篤志が農業体験で稲刈りに参加したんですが、子供たちはおもしろいとか珍しいと、けっこう楽しそうでした」

「無関心よりはいいけど、刈り取り後に数倍の作業が待っているんだがね」(笑)

「うふ、篤志に話しときます。いまは、またたく間に刈り取られますが、コンバインを導入する前は、やはりあのように、ひと株ひと株手で刈り取っていたんですよね」

「私も中学生ころまで、田しごとはひと通り手伝わされた。町史に、そのあたりの記述も散見される」

> ☆秋の稲刈りには、多くの雇い人夫が動員されたが、とりわけ、能登地方からの刈り取り部隊、移動班の活動は昭和20年代から40年代まで続き、早場米奨励の施策とも関係し、多くの人々がこの地で働いた。☆

以下、同年兵の縁から三納T家へ応援にきたM氏の回顧録より

> ☆・・早場米奨励金は三段階に日限があり、最初の九月十日の供出(きょうしゅつ)を目指して懸命な取り入れ作業が行われた。早朝五時に起床、洗面もせず裸足のまま田圃へ走るのであった。家族以外に女の人夫が二人、山村から来ておられ、Tさん夫婦と私に五人で朝食前に七畝歩(7アール)田二枚を刈り上げる。只、刈り倒すだけではあったが、朝食は七時半頃であった。八月二十日頃からの作業で残暑はなお厳しく(中略)、加賀の大地に吹く風は異常に暑く今思えば想像を絶するものであった。夜は九時、十時頃まで仕事をし、籾摺りの日は夜半を過ぎることもあった。二十日ほどの期間で二町五、六反の田を全部刈り取り供出まで終えた。☆[注1]

「朝に夕べに星をあおいで、そんな仕事の連続・・よく体が持ったものですね」

「朝星夜星といえば、つい先だって展示された津幡の加茂遺跡を思い出すな・」

「それ、何ですか？」

「確か牓示札(ぼうじさつ)といったかな。その第一条に、

> ☆一つ、田夫、朝は寅の時を以って田に下り、夕は戌の時を以って私に還るの状。
> これを現代語に訳せば、農民は寅時〔午前3時～5時〕に田に下り、戌時(午後7～9時)に家に帰れ。となる☆[注2]

「いったい、いつの話ですか」

「施行年月は849年と記され、現存するものとしては日本最古のお触れ書きとされるそうだ」

「1200年も昔と同じとは、驚きですね」

「昭和期の収穫作業の、具体的な記述も残されているよ」

【キラバ積み】

☆稲の地干しは、刈り取った稲をそのまま1～2日天日に干して、そのあと、田んぼの中に、にお積みし、さらに天気のよい日に広げて乾かすものである。その干し方は、「大場」時代は刈り取りが十月になるので南向きに長く刈り束を並べる百足干しをし、これを 3 回行った。早生になって気温の高い時期に刈り取れるので、放射状型の「渦巻き干し」となり、これは 2 回で良く、能率が上がるようになった。脱穀調整作業の機械化、地干しの改良などは、端境米出荷に大きく寄与した。☆[注3]

「その頃の田圃の様子は、写真にも残っている」[注4]

☆地干し、にお積みは金沢平野に行われた独特の乾燥法で、手取川扇状地に限られていた。昭和 26 年頃から河北郡南部・小松・加賀市の一部にまで広まった☆[注5]

「暑いなか、無理して早く収穫するメリットはあったのですか？」

「支払う労賃を考えれば、早期出荷への加算金は、思うほど旨みがあったものかな？　むしろ、端境期（はざかいき）に都会の人々に米を届けるという使命感のようなものだったのかもしれない」

「米の生産調整があたりまえになった今では、痛ましさが先に立つ・・」

「なんとも目ざましい時代相の変転。だからこそ歴史や記録に意味があるんだろうな」

三月も中旬になると、農道の路肩や畔にイヌノフグリが可憐な花を淡い陽光に輝かせ、田面に目を転ずれば白いナズナの花がひそやかに咲き始めている。これまで、無人にちかかった野にも、畦の手入れなどに精出す人影が目につくようになる。

（2010.4.20）

[注1]野々市町史「民俗と暮らしの事典」－122－
[注2]津幡加茂遺跡　展示資料より
[注3]宮森久男「石川の米づくりとむら」－69－
[注4]「愛と和の町ののいち」－47－
[注5]中谷治夫「石川の米づくりとむら」－203－

0018：松金線　電車

余寒の残る3月上旬、庭の沈丁花が紫の蕾を開きはじめる。艶のある葉色や小振りな花もさることながら、一面にただよう花の芳香がなんとも心地よい。

「松任から金沢まで、北鉄の電車が走っていたそうですね」

「松金線のことだね。私の小学高学年、丁度篤志君くらいのころかな、近所の中学生に連れられて兼六園へ花見に行く時などに乗っていたよ。昭和30年4月、旧野々市町と富奥村が合併しているんだが、同じ年に廃線となりバス運行に変わっている」

「どんな電車だったんですか？」

「貴重な写真が、町史に残されている」

「大きな箱みたい・」（笑）

【廃止前の松金電車】

☆松金線が廃止されたのは、昭和30年10月15日です。写真はもう終わりに近いころに蓮花寺の入り口から現在の国道八号線三日市の陸橋の所を横切るもの。座談会では、さらに三氏の発言が続く。
[I]：松金線は私たちが金沢の学校へ行っていた時分は、まだ、金沢の兼六園下が終点だった。その後に野町駅が終点になった。[S]：一番長いときは、松任発で小立野まで行っておったことがある。その期間は暫くで、昭和ひと桁の頃には車庫前といって、公園下まで行くのが松金電車だった。[H]：その頃は有松を通っていたが、終戦直前の昭和19年ころ、西金沢まわりになった。☆　［注1］

「石川線で、最近鶴来駅から加賀一宮までの一部区間が廃線になりましたね。松金線もやはり利用客の問題だったのですか」

「いやそうではなく、モータリゼーションへの一側面だろうな」

☆それから国道の問題ですが、松金線の廃止が決定されなかったので、松任、金沢間が現在もなお未完成。先般松金線廃止が決定したのでこの国道の着工もぜひ早急に実現したい。☆　［注2］

「当時の兵地町長の発言からも窺えるが、のろのろ走る軌道電車よりは車が走れる広い道路へと、社会の要請が向かっていたようだ」

「廃線のいきさつは分かったのですが、いつ頃から松金線は利用されていたんでしょうか？」

「そこは私より、もう少し上の年代の方でないと分からない」

☆松金電鉄は、大正５年３月に開業。押野丸木、野々市、野々市西口、太平寺、三日市（稲荷]に停留所をおいた。☆［注3］

「営業は、約40年間だったのですね」

「まだ、その前身があるそうだ」

☆松任のハッ矢と金沢の野町間の旧北国街道沿に馬車鉄道が開通したのは、明治37年（1904）6月である。二本のレールの上に台車を載せて馬が引っ張るというものだった。車両14台と馬19頭が常備され、午前6時から午後5時40分まで、40分ごとに走っていた。（中略） この鉄道馬車は12年間続いたが、大正5年松金電車の開業で役目を終わっている。☆ ［注4］

「北国街道に沿った馬車鉄道から電車の線路が町並みの北側へ、さらにそこが国道の拡幅で廃線にと、50年余でまちの様相がおおきく変転してるんですね。」

「まるでタイムマシンにのっているみたい」（笑）

（2010.5.17）

[注1]「郷の今昔　」－333～334－
[注2]「愛と和の町ののいち」－13－
[注3]「図説　野々市の歴史」－112－
[注4]「よもやま話」－257－

0019：木呂川　木呂揚場　>>場所：

懐かしい街道筋の面影を今に伝える野々市町本町通りと交差する川の橋詰。建物の一部が川面にせり出すようにして建っている工場に気付く人はいるだろうか。車の往来が激しい橋脚の縁石に「木呂場橋（ころばはし）」と刻まれた銘板がある。工場は熱野製材工場、川の名前は「木呂川」だ。

「昨年だったか、すぐ近くの国道にかかる橋の改修工事がありましたね」

「そこから、押野方面へ流れているのだが、その橋より下流は急速な市街化にともない国の二級河川になっている」

「上流は農業用水なのですか」

「手取川を水源に、新庄地内からを『木呂川』と称している」

☆「木呂川」は、石川平野を潤す手取川七ヶ用水の中で一番東側、金沢市と野々市町を流れる富樫用水に属する。富樫用水は東から①荒川〔現・高橋川〕②木呂川③林口川の三水系からなる。（中略）富樫用水は、手取川七ケ用水土地改良区管理で農水省管轄、それより下流は国交省管轄の二級河川で、用水と治水に分けて管理整備が進められている。☆［注1］

「木呂って、何か分からない・」

「史ちゃんの世代には、無理だろうな（笑）。てごろなガイドブックがある」

☆加賀藩では松の木の伐採を禁止していたため、都市部の薪材を補うために白山麓から欅（けやき）を伐採し燃料とした。欅は長さ1mほどの木呂にして川に流し運搬した。木呂揚げ場はその名のとおり、木呂川を流してきた木材を引き上げて集積していた所。約五千坪の広大な敷地は高い土手で囲まれ、この中に木呂川から木材を流し込んだ。乾燥作業は村民の副収入でもあったが、明治22〔1889〕年を最後に廃止された。☆［注2］

「木を短く切った薪材をコロと呼ぶのですか。ガスやオール電化の台所では、薪の意味さえ分からなくなりますね」

「川北町の手取大橋ちかくにも木呂場という地名がある。同じように平野部や小松方面の需要にこたえていたのだろうな。」

☆流れを利用し、木材を山から下流に運ぶことを「木呂流し」と呼ぶ。上流の山から伐り出した木材を1～2間の長さにそろえ増水期に、いっせいに流し、下流まで一気に運んだ。☆［注3］

「その頃での主要な燃料だった薪材の備蓄地だから、その分配と運搬などに関わる文書も残されているようだ」[注4]

「少し難しいけど、加賀藩の統制や監督ぶりが窺えますね」

「ところで、江戸深川を舞台にした時代小説に、おもしろい場面があったよ」

☆掘割の中には、丸太や角材が浮かんでいて、そのむこうには大きな筏もみえる。（中略）東吾が笑った時、掘割の中では鮮やかな角乗りが始まっていた。太くて重い材木が、川並鳶の足さばきで、くるりくるりと回転する。それが手始めで、乱れ返し、水車、八艘とび、三段構えなど、数人ずつ、入り乱れての競演になる。見物人の間から盛んな拍手や歓声が湧いて、掘割の中は熱気が渦を巻いた。☆[注5]

「野々市の木呂揚げ場でも、そんないなせな姿があったかも・」

「そう、印半纏（しるしはんてん）の若い衆なんかがね」

「うふ、想像するだけで楽しくなりますね」

（2010.6.8）

[注1]「納税いしかわ」183号　平成18年11月発行　－3－
[注2]「ののいち歴史探訪」　－37－
[注3]能美市立博物館　展示説明より
[注4]「野々市町史　資料編2」　－355－、－362－
[注5]平岩弓枝著「柿の木のした」より

0020：加賀の白山もえ候

白山の　そのしののめや　ほととぎす　鏡花

初夏の早朝、はるか東南に白く輝く霊峰白山。ほととぎすの鳴き声も聞こえて、その爽やかさが一層強まる。泉鏡花の生れ故郷金沢の、静かなたたずまいが思い浮かぶ句だ。

「雪をかむった白山の眺めは、いつ見てもきれい・」

「その姿の美しさから古来、富士山・立山とともに日本三名山の一つに数えられている」

「晴れた日の白山の眺めは、何か神々しいというか崇敬の念がひとりでに湧きますね」

「史ちゃんでもそうか、平安時代のなかごろから、比叡山延暦寺とむすびついた白山信仰が広まり、『平家物語』にもそれに触れた文がある」

☆安元二年八月、白山の神輿、既に比叡山東坂本につかせ給ふと云ふ程こそありけれ、北国の方より、雷おびただしく鳴ッて、都をさしてなりのぼる。白雪くだりて地をうずみ、山上洛中おしなべて、常葉の山の梢まで、皆白妙になりにけり☆［注1］

「白山信仰というと泰澄（たいちょう）大師が有名ですね」

「越前の生まれで、養老元年（717）に、はじめて登頂したとされる伝承のひとだ」

☆泰澄伝説にあるような見事な神仏習合の形であらわれる白山信仰は奈良時代のものではなく、平安時代のものであることがわかる☆［注2］

「伝承には、後世の潤色が多いってことですか」

「登拝道は美濃・越前・加賀からの3ルートあり、それぞれの入り口にあたる馬場と中宮（遥拝所）が長滝寺・平泉寺・白山比め神社だった。」

「明治の神仏分離令以降も、当地では男子の成人への通過儀礼としての白山登山が昭和30年代ころまで残っていた。3～4 日間歩きずめの登頂は、その困苦を乗り切った自信ともなって、周囲からも一人前の男として認知されたという」［注3］

白山登山記念（大正9年8月・本町　竹内源松撮影）

「そういう時代もあったんだ。いまは、スーパー林道など道の整備がすすみ、夏の登山や春秋の行楽にとレジャー的要素が強いですね」

「多くの人たちは、霊峰白山とひと口に言っているが、16世紀に噴火というか黒煙が上がったという記録がある」

☆熊本県の南八代地方を支配していた相良（さがら）という小さな大名がいた。天文 24（1555）年に書かれた文書「相良氏法度」の中に、『加賀の白山もえ候事』と明記されている。（要約）☆［注4］

「へえー、そうなんだ。初耳だわ」

「この文章を読んだ 13 年前にはオヤッと思ったが、その後、これを裏付ける資料をいくつか見つけ、中高校生のころ習った休火山という分類はあまり意味がないことが分かった」

☆慶雲3（706）年　越前の国に山火事『続日本紀』、長久3（1042）年　室・社堂などの損壊（水蒸気か）、天文16（1547）年　頂上から火煙や土砂を噴出す。天文23（1554）年　4月1日に山頂より煙が上がった。剣ヶ峰の南の方が焼け上がり、大きな岩を吹き上げて、白山奥宮正殿の屋根が打ち抜かれた。6月になると、剣ヶ峰全体から煙が立ち上がった。10月8日に大震動がおき、鶴来の白山本宮までも煙が充満した。（要約）☆［注5］

「いまは活火山とそれ以外の火山のふたつになって、白山は活火山になってますね」

「そう、現時点では噴火の前兆はないが、長期的には噴火の可能性が高い時期にあるという」［注6］

「ちょっと怖いわ（笑い）。白山の火山活動が始まったのが、30～40万年前だと、人間社会の歴史などほんの一瞬ですね」

「たとえ考古学的視点を含めても、地質学的スケールとは桁が違うからね・」

「はなしは飛ぶが、気象観測網が整って、近年台風の進路予報が TV などで刻々知らされるようになった。日本列島を縦断するような進路をとる台風のおおくのケースで、白山が屏風の役割をはたし、石川県での強風被害が少なくなっている模様だ・・」

「景観・貯水機能などに加え、風害でも白山の恩恵にあずかっているってことですか」

「わたしなりの判断だが・・。昔の人たちはそれらを直感的にとらえ、神霊の宿る山として、素朴に白山を仰ぎ讃えていたんだろうね・」

白山を借景に県立大学を望む［注7］

（2010.7.15）

［注1］岩波文庫版「平家物語ー」　－100－　鵜川軍の章　より
［注2］白峰村史　　－584－
［注3］図説野々市町の歴史　　－167－
［注4］藤木久志ら著「加賀の一向一揆五百年」　－34－
［注5］「白山火山（白山の自然誌12）」石川白山自然保護センター発行　－19－
［注6］平松良浩　「白山噴火の可能性」講演レジュメより
［注7］野々市なんでも百景コンテストより

0021：七ヶ用水　手取川　>>場所：（給水口）

「自然の恵みと言えば、手取川も外せない」

「その手取川によって出来た扇状地が、金沢平野だよね」

「篤志くんも、もう習っているか。社会科かな・」

「うん・」

「そして、平野部の水田を潤す水も、その手取川から引いている」

☆今から数えて百年前の明治 36 年 5 月 24 日、ずい道を勢いよく流れ出る水に、人々は歓声と驚きの声を発し、花火30発を打ち上げ、餅をまき（中略）。また、流域の村々では仕事を休み、七ヶ用水完成のお祝いの日とした。☆［注1］

「平成 14 年 5 月に行われた手取川七ヶ用水百周年記念式典での、土地改良区理事長の挨拶の一部だよ」

「伯父さんもその席にいたんですか」

「えへん。（笑） 県知事や台湾の嘉南農田水利会などの来賓を加え盛況だった」

「写真で見ると、明治の建造物らしくレンガ造りで、がっしりした感じですね」

【給水口　明治36年】

【給水口　平成14年】

「洪水・渇水対策などを目的に、オランダ人技師ヨハネス・デレーケの指導下に大水門やずい道などが完成した」［注2］

「デレーケさんとは、いわゆるお雇い外国人ですか」

「私も知らなかったが、同じ本に簡単な紹介文が載っている」

☆デレーケの滞日期間は外国人技術者の中でもっとも長く（明治 6～36 年）、この間、筑後川や常願寺川の改修、大阪港や鳥取港の築港など多くの重要な工事に携わったほか、各地にデレーケ堰堤、オランダ堰堤などと呼ばれる堰を造っている。☆［注3］

「七ケ用水の七ケはどんな意味なの？」

「いい質問だな。主な水路が七つあるのだが、そこには扇状地の開墾の歴史がからまっている」

☆手取川の用水開設は、少なくとも平安後期には始められていたものと言えます。近世の用水文書（「岡野家文書」）には、富樫・郷・中村・山島・大慶寺用水を「石川方五ケ用水」とし、古代の能美郡にある中島・新砂川用水に対し古格の用水であることを示しています☆［注4］

「明治 36 年の取水口合口で、一つの水利組合になったという意味ですね」

「昭和 27 年に土地改良区へ組織変え。管轄する水系概略図は、ここにあるよ」[注5]

【水系概略図】

「日本海へゆくまでに、伏見川や犀川と合流してるんだ」

☆手取川七ケ用水の水路及び内川水路は、人工的に開鑿（かいさく）したものではなく、かって手取川の流路であった川跡を改修して用水路に利用したものである☆[注6]

「金沢市の一部から白山市・野々市町・川北町と行政区域をこえた広い地域ですね」

「そう、近年は 5,000ha をきったようだが、土地改良区への組織変更時は 7,300ha の受益面積だったという」

☆水源の安定確保と夏期の渇水対策として、大日川ダム建設が昭和 35 年に始まり、7年余で完成している☆[注7]

「その頃の公共事業は、地域住民のニーズに沿っていた」（笑）

「昭和 30 年代まで、夏に干天が続くと『番水』という慣例があったが、ダムの貯水機能に加え農地面積の著しい減少もあって、それも死語と化したようだ」

「水の来るのがあたり前ではなかった・・」

「そうだよ。私が子供のころ、数人で鳶口（とびくち）や鍬をかついで家の前を通るのを、目にしたことがある。夕食時にそれを口にすると、親は『番水なのだ』と答えていた。たぶん、下流の押野あたりの農家の人たちだったろう」

「今は、あって当然と思うことが、数十年遡ると大きな難題だった・」

「農村部の急激な市街化で、近年は、用水機能より雨水の排水対策が、土地改良区の工事の中心課題になっているんだよ」

（2010.8.10）

[注1]七ケ用水 No77（ ’02－7 発行　土地改良区広報紙）　－2－
[注2]心やすらぐ日本の風景　疎水百選　　－175－
[注3]　同上　　－69－
[注4]「注 1」に同じ　　－4－
[注5]手取川七ケ用水誌（上巻）　－15－
[注6]　同上　　－39－
[注7]「注1」に同じ　　－5－

0022：歌舞伎「勧進帳」　>>場所：（富樫館跡と安宅の関の位置関係）

「このあいだ、友達数人と小松の安宅へ行ってきました」

「毎年、初夏の風物詩として、こども歌舞伎がマスコミで取り上げられるからな・」

☆天保11年（1840）、江戸で歌舞伎「勧進帳」が初演された。ほぼ能「安宅」を踏襲し、富樫と弁慶の息づまる問答が追加され、劇的緊張はさらに強まった。以来今日に至るまで「勧進帳」は頻繁に上演され、時代を超えて日本人の琴線にふれるドラマとして生き続けている。☆［注1］

「歌舞伎はまだ見たことがないので、銅像の顕わす仕草や『勧進帳』の意味がよく分からないんですけど・・」

「私も若いころは同じ感覚で、他人のはなしを聞いていたよ」

【安宅の関　智仁勇の像】

☆住吉神社のとなりの砂丘が、いわゆる安宅関跡。与謝野晶子の歌碑や弁慶と富樫の銅像がある。1187年（文治3）、頼朝の目をのがれ、山伏に変装した義経たちがここで富樫左衛門尉に見咎められたという、室町期の謡曲「安宅」や幕末の歌舞伎「勧進帳」の舞台である。もとよりこの話は虚構の世界の語りごとにすぎないが、あえてそれを史跡に指定し、巨大な銅像をたてるところに、日本人の“判官びいき”の結晶がみられる。☆［注2］

「頼朝や義経は実在した人物ですよね」

「平家打倒の功績者義経が、一転、追捕の身となり逃亡生活を余儀なくされる。そこを巧みに劇化して、人々の心をつかんだのだろうな」

「一の谷や壇ノ浦の合戦で目覚しい戦功を上げながら、実の兄から厳しく追求される境涯は人々の同情をさそいますね」

「天平のころからかな。寺社の造営に際し諸国から寄進をつのるようになり、その趣旨を書いたものが勧進帳とされる」

☆安宅の関は、もともと史実ではなく、文学上の虚構の産物であった。室町時代に成立した『義経紀』巻七「北国落ち」に描かれた越前三の口の関、加賀富樫の館、越中如意の渡り、羽前念珠の関などの語りを基調としたものが、『平家物語』『源平盛衰記』の「文覚勧進帳読み」からも影響を受け、やがてそれらが幸若舞曲『富樫』『笈さがし』へと継承され、観世小次郎信光の手で謡曲『安宅』にまとめあげられ、歌舞伎『勧進帳』への道を開いたのである。☆［注3］

「筋立てそのものが、長い年月の中で、どんどん変化してるんですね」

「『義経記』自体が、実際のできごとから200年くらい後に書かれている」

☆歌舞伎「勧進帳」で繰り広げられる、義経、弁慶、富樫の緊迫した安宅の関（小松市）でのやりとりは、史実に基づくものではない。あったとしても、「義経記」によれば越中での出来事である。それでは、なぜ、このような舞台設定がなされたかというと、歌舞伎の原作になった謡曲「安宅」が初演されたころ（1465年）、守護代・山川八郎の一族郎党が主君の安泰のために犠牲となって潔く果てた事件があって、これが美談として京都の人々の話題となり富樫氏の人気が高まったことが背景にあるらしい。☆［注4］

「それで、歴史的にはさして実績のなかった富樫氏が、歌舞伎の名演目のおかげで全国的に有名になった・」

「江戸川柳にも沢山詠まれているようだ。一つ二つ拾ってみよう」

武蔵坊　あたかもまことらしく読み
咎しめを　かんじん帳で　言いひらき　［注5］

「おもしろい・。『あたか（安宅）も』や『咎し（富樫）め』など、うまく掛けてありますね」

「この御所人形［注6］など、江戸時代の『勧進帳』の人気のほどを示す証拠品だろうな」

「まっ、愛らしい。五月の節句にでも飾られたのかしら・・」

「演劇としての『勧進帳』人気の解説には、次の文章が全てを尽くしている」

☆「勧進帳」は、能「安宅」にもとづく一幕物（初演　1864）で、これを初めて立案し、演出し、主演したのは、七世市川団十郎（1792～1859）であった。（三世並木五瓶脚色）。義経を強力に変装させ、みずから山伏に変装して、奥州へ落ち延びようとしていた弁慶と、義経の逮捕を命ぜられていた関守の富樫とが、安宅の関で対決する。富樫の部下は義経の変装に疑いをかける。弁慶は通行の証文の代りに勧進帳のそら読みをして、山伏の身分を証明し、義経の変装する強力を叱って殴打する。

富樫は弁慶の芝居を見破るが、だまされたふりをして、義経の一行を通過させようとする。弁慶の側では富樫が見破っていることを知りながら、それを知らないかのように芝居を打ちつづけなければならない。少なくとも富樫の部下は、変装を信じなければならないからである。かくして富樫と弁慶の相互理解は、全く言葉を媒介としないで、その条件のもとにのみ、成立する。

もし、相互理解が成立しなければ、富樫か（命令違反）、弁慶・義経（逮捕）か、いずれかが死ぬのである。かくて彼らの暗黙の了解は、言葉による伝達を超える。☆［注7］

【加賀国安宅関弁慶主従危難救図［注8］】

（2010.10.18）

［注1］青山克弥ら著「ふるさと石川の文学」－60－
［注2］県高等学校社会科教育研究会「石川県の歴史散歩」－37－
［注3］藤島秀隆著「加賀・能登の伝承」－208－
［注4］八幡和郎著「戦国大名　県別国盗り物語」－238－
［注5］阿部達二著「江戸川柳で読む平家物語」－233－
［注6］石川県立歴史博物館発行「れきはく」No90（09・2・1）
［注7］加藤周一著「日本文学史序説（下）」　－127－
［注8］勧進帳ものがたり館（小松市安宅）　特別展パンフレットより

0023：平家物語「鵜川のいくさ」

庭先の玉簾が一斉に咲き出した。細い茎の先に白い花が可憐で、ひとしお涼し気だ。今年は連続真夏日が各地で50数日などと、観測史上例をみない猛暑に見舞われたせいか、例年より 3 週間くらいも遅い開花だった。

「勧進帳は多くの人に知られていて、何処で話しても前置きがいりませんね」

「そうだね。ところで全国区で郷土の歴史に関わるものが、もう一つある」

「何でしょう？」

「平家物語だよ」

「―祇園精舎の鐘の声―で始まるあの物語ですか」

「そう、たいがいの人は、中高校の授業で退屈した時間という記憶が強いだろうが、物語の前半部に、仏御前・白山信仰・鵜川軍など石川県にゆかりある出来事が続けて出てきて、これが結構おもしろい・」

「私なんか、ライトノベルに関心が向いて古典は素通り・」

「平清盛に寵愛された仏御前は、祇王とのからみで多くの人に知られているようだ。私には『鵜川軍』の章の方が、平安末期の当地の事情が推測できて興味を惹かれる。少し読んでみるかな」

> ☆彼の西光が子に師高と云者あり。是もきり者にて、検非違使五位尉に経あがッて、安元元年十二月廿九日、追儺の除目に加賀守にぞなされける。国務をおこなふ間、非法・非例を張行し、神社・仏寺・権門・勢家の庄領を没倒し、（略） 同二年夏の比、国司師高が弟近藤判官師経、加賀の目代に補せらる。☆［注1］

「ちょっと変わった文章ですね」

「もともとは語り言葉、それも琵琶の伴奏つきで聴くもの。その文字だけを黙読するとそんな印象になるのかな」

「琵琶は楽器としては古いものですね。二胡の演奏は、近年あちこちで聴けるようですが、琵琶の実演はまだ聴いたことがないわ」

「ついこのあいだ、音楽堂でその琵琶の演奏を楽しんだばかりなんだ。平家物語から『敦盛の最期』を原文どおりに弾き語る曲目があり、耳で聴くぶんには古語という感じが少なく、かなり意味が汲めたよ」

「あら、伯父さん・。なんか贅沢な時間を過ごしているみたい・・」（笑）

「話を戻そうか。文庫本で 2 ページ足らずだけど、国府や鵜川（現小松市）を舞台に騒ぎがおき、それが都へ波及する過程で、このシリーズ前々回の『加賀の白山もえ候』でも一部引用したように白山宮と比叡山の関わりが書かれていて、おのずと引き込まれる」

「そうですね」

「寺の浴場への乱入を発端にして、国衙（こくが）と寺社勢力の双方が報復合戦に及ぶなど、子供のケンカみたいだが、農地への賦課など経済権益をめぐる根の深い対立の表面化が、事の本質だろうな・・」

「物語りだから、派手なケンカ騒ぎに仕立てたってワケですか」

「だいぶ、察しが良くなったね（笑）この師高・師経らの処分をめぐり、次章『願立』次々章『御輿振』では、中央での大きな政治問題へと展開してゆく。まさに源平合戦のトリガーとも言える近藤師経の行動だった」

「石川では源平合戦といえば、倶利伽羅での木曽義仲的な印象が強いけど、その前段でも深い関わりがあったということですか？」

☆其後当国の在庁ども催し集め、其勢一千余騎、鵜川におしよせて、坊舎一宇も残さず焼きはらふ（略）☆［注2］

「小さいが、ここにおもしろい絵が残されている」

「これだと、文章以上にリアルな感じで迫ってきますね」

「お隣の福井県にゆかりのある、岩佐又兵衛という戦国時代の画家の作品だよ」［注3］

「『当国の在庁ども』の中に、国司の配下として当地を治めていた林や富樫の一族も動員されたようだ」

☆富樫家直は、安元二年の鵜川涌泉寺事件に関わったとして、後に失脚して終身上洛することがなかったと伝えられている。堀麦水著「三州奇談」などの家直を主人公とする馬塚伝承は、白山衆徒らに仏敵と見做され失脚した家直の実像を隠蔽するために富樫側の後人による増補といえるであろう。☆［注4］

「伝承や古誌の記述は、無条件に事実だったとするのは考えものなのですね・」

「つい先日、松任で近藤師高についておもしろいものを見つけた」

☆安元2（1176） 加賀介近藤師高 館をつくる（築城）☆［注5］

「目代の居住地が小松辺の国府ではなくて松任だと、富樫や林の支配地と目と鼻の近さ・」

「先祖が藤原系（？）だから、目代の要請を断れなかったのか。国司の館の近くに住むため、知らぬ顔ができなかったものか。あるいは自分の所領地に、白山宮などへの寄進による荘園化面積が増えて、この機会をとらえてその蚕食の一挙挽回を期待しての行動だったのか。いくつかの理由が考えられる」

「また、宿題が増えましたね」（笑）

（2010.12.21）

［注1］山下宏明ら校注　岩波文庫版「平家物語（一）」 －98－
［注2］　　〃　　－100－
［注3］岩佐又兵衛勝以「和漢故事説和図　近藤師経と寺僧の乱闘」（福井県立美術館所蔵）
［注4］藤島秀隆 「鵜川いくさをめぐって」 ののいち町民大学校講義より
［注5］松任城址の碑文より
　　鏑木悠紀夫著 「松任城と一向一揆」 －32－
［参考文献］若林喜三郎監修 「石川県の歴史」－67－

0024：林氏の台頭　扇状地の開墾　>>場所：（ろくらぐち公園）

「このところ、『武士の家計簿』という映画が、ご当地ソング的な話題になっていますね」

「そうだね。私も4年くらい前だったか、磯田道史著の新書版を印象深く読んでいる」

「さむらい（武士）といえば、ヤットーというか刀や槍のイメージが先立つのですが、家計簿というのは意表をつかれる感じ・」

「まさに、そこが出版社のねらいだろう。本の内容は、地味な経済史研究。江戸時代だから身分的には武士だが、今でいえば、県庁の経理部門の役人だと思えば理解しやすい」

「そうなんですか。近いうちに友達を誘って観にいこうかな・」

「中身は見てのお楽しみとして・・。ところで、江戸期ではなく、武士の興りというか平安期のこの地の様子が、次の文に出ている」

☆11世紀末以降、その姿を鮮明にしはじめる加賀・能登の武士団の主流となったのは、「今昔物語集」の「芋粥」の説話で名高い越前の豪族藤原利仁の末流を主張する藤原（斉藤）姓の領主たちであり、なかでも加賀や口能登で目立つのは、石川平野の東側の拝師郷（野々市町上林・中林・下林一帯）を拠点とする林氏と、その同族を主張するグループであった。☆［注1］

「あら、伯父さんのホームグラウンド・」

「900年以上も昔のことだがね・」（笑い）

「拝師とかいて『はやし』と読むのですか」

「そう、上林の神社裏というか、用水路に掛かる橋の銘板にはこの文字が刻まれている。歴史的な資料のひとつとして、白山市菅波の正八幡神社の『南無拝師明神』という神号軸がある」［注2］

「平安時代というと、源氏物語や清少納言の枕草子など国風文化に代表される柔和なイメージが先立つ・」

「みやこではね。だが、地方では鉄製農具の拡がりに支えられ農地の開墾が進んだよう　だ。開発の時代背景は、すぐ、後ろの注釈に

☆林氏は、その祖貞光が、林介と号しているところから考えておそらく、最初は、受領の留守をあずかる国衙の在庁官人の一人であり、やがて、手取川扇状地の一角を占める拝師郷の郡司となって、開発の拠点とした外来勢力と思われる。☆［注3］

とある」

「この開発の進展の状況を示すものとして・

> ☆平安時代の中・後期から室町時代にかけて林氏は、その一族を石川郡の各地に配置して支配と開発を進めていた。手取扇状地においては、富樫用水の林口川および郷用水の東川筋の上林・中林・下林地域に林氏、郷用水の先進地である下郷に横江氏を置いて郷用水地域を占め、中奥地区では有力な倉光氏を配し、宮永氏は中村用水の中郷・下郷をおさえ、安田保・北安田保地域には松任氏を配した。
> 結局林氏一族は、富樫用水林口水系から山島用水北川水系に至る地域（扇状地の半分を占める）を治める体制を確立した。☆［注4］

がある。なまじ歴史専門書より、地勢的に的確な記述が見られ分かり易い」

「農業生産には、水が欠かせない・」

「農地の開墾は、用水の制御の歴史でもある。蓄積したノウハウを周辺に展開しながら、林一族は力をつけていったのだろう」

「白山町に、『ろくらぐち公園』という小公園があって、下林から1Km も離れていませんね」

「そこなんだよ。林介貞宗から貞光・光家・光明と4代で、70～80年間。地域の有力者としての勢威を保てば、周辺住民から六郎（＊身内での通称）勢力圏への入り口（六郎口）という意味合いでの呼称と解釈できないか・」

「へぇー、伯父さんの推理ですか。なんか私もはまりそう・」

「当町内だけでなく、旧鶴来林地区などにも、六郎屋敷とか六郎杉といった古称が幾つも残っているそうだ」

「地名に刻まれた歴史の残影ですか・・」

「うまい言い方だな。一本とられた」（笑）

（2011.1.4）

［注1］若林喜三郎監修「石川県の歴史」－63－
［注2］北国新聞　昭和60年9月4日号
［注3］注1に同じ
［注4］手取川七ケ用水土地改良区発行「手取川七ケ用水誌（上）－45－
［参考文献］図説「野々市の歴史」－30～31－

0025：源平合戦から承久の乱まで

「日本全国を騒乱に巻き込んだ源平合戦の頃、当地の武士たちもその舞台に登場しているようだ・」

☆「平家物語」巻七に、木曽義仲自らは信濃に有りながら、越前国火打城をぞ構えける。かの城郭にこもる勢、平泉寺の長吏斎明威儀師、富樫入道仏誓、稲津新介斉藤太、林六郎光明、石黒、宮崎、土田、武部、入善、佐見を始めとして、六千余騎こそ篭りけれ云々。☆［注1］

☆寿永二（1183）年、越前国燧城（福井県今庄付近）をめぐる源平の攻防で加賀国住人林六郎光明の嫡子、今城寺太郎光平の闘いぶりが源平盛衰記巻28に記されている。☆［注2］

「数千、数万という軍勢の動員には、いやおう無しに参戦を迫られますね・」

「源氏方でも、木曽勢に加わったため、義仲の敗死とともに、当地の武士たちの戦功は帳消し・・」

「北陸へも鎌倉幕府の支配権が強まって来たのですね」

「その後、承久の乱まで、中央政権との繋がりは極めて薄い状況だったようだ・・」

☆関東から送り込まれた守護や地頭の制圧下に置かれていた加賀や能登の武士たちにも、一度だけ、関東の圧力を押しのける機会がおとずれた。承久三年（1221）に後鳥羽院が企てた軍事行動であり、地元武士の名門である林家綱（光明の孫）は、越中の石黒氏らとともに、後鳥羽院方に味方して、反抗を試みた。
しかし、その反撃がみじめな敗北に終わった結果、石川平野の武士団の頂点にあった林氏が没落し、かわって、富樫氏が地元武士を代表するようになる。☆［注3］

「運が悪い・」

「そのうえ、北條攻めの闘いに、家綱の子則光と孫の弥二郎家朝が関東に向かったため、二人とも鎌倉で処刑されてしまった」

「150年くらいの勢威も、そこで途切れた・」

「リーダーを失えば求心力がなくなり、勢力圏も狭まるのは世のならい・」

☆承久の乱後の大きな変化は、これらの職権を行使する守護が幕府の指令によってのみ動くことになった点である。☆［注4］

「京でも後鳥羽上皇は、隠岐島かに流されていますね」

「土御門と順徳院も連座して配流された。これに関連して、ほほえましいエピソードがある」

☆ミヤコワスレという大変人気のある花がある。「都忘れ」とは、なかなか優雅な名前だが、これには一つの物語がある。承久の乱に敗れて佐渡島へ流された順徳院が、ある年の秋に、庭に一株の白菊が咲くのを見られた。それまで、過ぐる日の都のことばかりを懐かしがっておられたが、この花を見るうちに都のことを忘れられたという。その後、この花を「都忘れ」と呼ぶようになった、ということだが、ミヤコワスレの花は秋ではなく初夏の花である。☆［注5］

「私もミヤコワスレは好き・。清楚な花だから、その印象と華やかな京の都の対比に妙味があって、いかにもありそうな話になっていますね」

「話をもどすが、林光明時代の富の集積を示す証拠品が残されている」

「何でしょう・」

「白山比咩神社にある鞍だよ。『牡丹文螺鈿鞍』は光明の寄進したものとされ、国の重要文化財の指定を受けている」

☆黒漆塗地に螺鈿の技法により、牡丹の花を文様化した宝相華文の折枝を配した鎌倉時代の代表的な軍陣鞍である。（中略）林六郎光明が戦勝祈願のために献納したものと伝えられている。☆［注6］

「素敵。写真だけでも、費用を惜しまずに作られたものと分かりますね」

「平安末期から鎌倉時代にかけての、稀少な工芸品の一つだろうね」

「伯父さん流に言えば、栄枯盛衰の一端というワケ・」

「今日は、史さんにやられっぱなし・」（笑）

（2011.1.25）

［注1］寺西草骨著「加賀武士団の創統・林一族」－22－
［注2］　“　－39－　いずれも森田柿園著「加賀志徴」からの引用
［注3］若林喜三郎監修「石川県の歴史」－75－
［注4］五味文彦著「日本中世史」－25－
［注5］柳宗民著「柳宗民の雑草ノオト2」－187－
［注6］石川県立美術館編「石川県の文化財―美術工芸編―」－218－

0026：閑話休題　２

中世から戦国期の歴史上の動きを理解するために大切な、「村」や「城」についての端的な解説文を二つ紹介しよう。

村

村といえば「日本的村社会」などという言葉の印象から、日本の歴史とともに存在していたように錯覚しがちであるが、現在我々の知る村が成立してくるのは中世後期であった。その村は惣有財産、地下請、村法（そんぽう）と自検断（じけんだん）という三つの要件をそなえた自治組織である。

惣有（そうゆう）財産とはむらという組織のもつ財産であり、村という、いわば「法人」に属するものである。村民の生活資源を確保する山野など入会地、また農業用水の供給を維持するための灌漑施設、さらには村の資産として蓄積され、村が必要とする資金調達の際用いられる惣有田などの土地がこれに該当する。

第二の地下請（じげうけ）は、近世になると村請ともいわれ、村という組織が領主に対して年貢納入を請負うものである。これにより領主は村民を直接支配することをやめ、通常は村との契約関係において年貢を徴収するのみとなり、村民の訴えがなされるなど非常の場合以外村に介入しないようになるのである。

第三に、村によって村のための法令が制定され、それに基づいて犯罪の処理，犯人の逮捕・処罰などの警察行為が村民の手による自検断により実施されるようになるのである。

これらをそなえた惣村と呼ばれる運営組織を持つ村は、鎌倉末に畿内とその周辺地域に現れ、室町時代に各地にひろがっていった。戦国乱世の民衆のおおくは、この村の一員として戦乱に対処していったのである。
（神田千里著「戦国乱世を生きる力」―70－）

掻揚城と詰めの城

ちなみに、日本の城と中国・西洋の城の大きな違いに、石垣の存在がある。ルイス・フロイスも「切断されていない石を積み上げた」という表現で、ヨーロッパやエジプトの切石タイプとは違う石垣に注目している。

良い石が、日本ではあまり産出しないせいだろうが、それでも石垣は信長の時代に急速に普及した。それまでは、堀を掘った時に出た土をそのまま脇に積み上げた「掻揚城」つまり土塁と堀に囲まれた城が、日本における最も標準的な城だった。そして甲州武田氏のように、舘は町の中心に掻揚式で作り、いざという時の避難場所を急峻な山の上に作る（詰の城）という方法も一般的だった。
（井沢元彦著「逆説の日本史１０－戦国覇王編－」－３０５－）

農民組織が守護を倒す一揆や「高尾での攻防」を、その時代に即してイメージするための村落や城の具体的な記述があまり見られない中、上掲の二文は格好の材料と思えます。

（2011.02.24）

0027：高尾での攻防　加賀の一向一揆　>>場所：

☆長享二年（1488）六月、加賀の守護富樫政親が国内の反政親派の国人や、真宗本願寺派の坊主・門徒らによって攻められ、石川郡富樫庄の高尾城で自害して果てた事変は、世に長享一揆とよばれ、日本歴史のうえで画期的な出来事とされている☆［注1］

「中学や高校の歴史の時間、石川県がクローズアップされる唯一ともいえる出来事ですよね」

「私が、中世の日本史に強い関心を持つようになった原点もそこにある」

［注2］

「少し長いが、『官地論』という地元の戦記物からの引用だよ」

「分かりにくい単語もあるけど、身震いするような戦闘場面の表現ですね」

☆戦国軍記というジャンルがある。応仁の乱以後の戦国動乱の世、諸国で戦われた大小さまざまの合戦を、地方ごと合戦ごとに記録した軍記をいいその数はおびただしい。なかでも、長享年間の加賀一向一揆と南加賀守護富樫政親の抗争を描いた「官地論」は屈指の佳編である。（中略）　作者不詳ではあるが、一向宗（真宗）の思想・教説にくわしい人物であり、少なくとも富樫側ではない。☆［注3］

「平家物語や源平盛衰記などが中央政権の争奪とすれば、官地論は地方政権の争奪を描いたもの。成立は一揆支配の終わりころとされる」

「どうして、守護を攻めることになったのでしょう・」

「伏線は、日本国中を騒乱に巻き込んだ応仁の乱だろうが、直接には戦費の調達に伴う賦課、今で言えば増税が原因とされる」

☆一揆勢と富樫の対立が爆発したのが、長享元年（1487）の九代将軍義尚による六角征伐であった。この戦いには全国の大名が動員された。政親も参陣した。つまり自分の軍団を率いて国を留守にしたのである。

そして、新しい軍役のために、地元加賀には臨時の税や労役が課せられることになった。当然、不満は広がる。しかも、政親は国にいない。

一揆勢にとっては、絶好のタイミングであった。彼等は政親に不満を持つ大叔父の富樫泰高をかついで、一斉に兵を挙げた。驚いた政親は帰国し一揆勢と戦ったが、結局翌年城に追い込まれ自刃した。☆［注4］

「この時、諏訪の森（矢作の藤岡諏訪神社周辺）も一揆勢の集結地の一つだった。［注5］また、主戦場高尾については、次のような後世の民間伝承もある」

☆富樫政親死するの際より、燐火此の高尾山間より出づ。世俗今是を高尾の亡主火といふ。政親の亡魂怨結して化する者耶・・（文化2(1805)成立の「越登賀三州志」）☆

「坊主ではなく、亡主火ですか。幼い頃聞いた『火の玉』のことですね」

「三百年もたてば、言葉遊び的な面も出るだろうが、政権中枢はもとより地元の庶民のあいだでも、衝撃的な事件として長く語り継がれていた証拠だろうな」

「勝った負けたは、その時だけのこと・」

「やはり、主君とあおいでいた人を攻め亡ぼしたことは、多くの人の胸の痛みとして残ったのかも・・。それを窺わせるものとして、室生犀星の文章が挙げられよう」［注6］

「ここでは、富樫と敵対したのが、一向宗ではなく佐々成政になっていますね・」

「加賀藩の始祖前田利家と佐々成政が一時敵対関係になったが、そんな後世の出来事といつか混同されていったのだろうな」

（2011.02.25）

［注1］郷土史事典　石川県　－79－
［注2］『官地論』「ふるさと石川の文学」より
［注3］ふるさと石川の文学　－61－
［注4］井沢元彦著「逆説の日本史8」－332－
［注5］図説野々市町の歴史　－52－
［注6］『鞍ケ岳の池』　室生犀星著「幼年時代」より
［参照］「虫送り」の DVD 解説書

0028：長享一揆のスローガン

「一向一揆というと覚えやすいのですが、一揆という言葉の意味が、私たちには分かりにくい・」

☆一揆とは、揆を一にする（道を同じくする）との原義を持つ、団結した集団のことである。この集団が、多くの場合武力行使に及ぶので、集団的武力行使のことと考えられやすいが、本来は団結した団体を指す言葉であった。☆［注1］

「揆を一にするといっても、具体的には何を指すのか、時代の壁に阻まれて理解しにくいのだろうね」

☆長享一揆のスローガンというか、結集軸は史料的には、三つでている。一つは寺社本所領還付。二つは、限りある年貢公事以外の課役（臨時軍費）の賦課を拒否。三つ目が、仏法を守る護法である。☆［注2］

「政治的な要求を掲げた結社でしょうか、現代に置き換えれば・。仏法を守るというものがあるから、土一揆や国一揆ではなく、一向という文字が加わった？」

「蓮如が北陸に布教を広めた時期と重なり、信仰を同じくする者が多数を占めれば、より団結が強まったと考えられる。幾つかの念仏宗派が、当時は一向宗と総称されていたようだ。」

「それにしても、守護を倒すほどの武力が農民にあったのでしょうか」

「私も、その疑問が出発点となって、中世の歴史書を漁って来たんだが・」

☆一揆の時に鐘を鳴らすとみんなが武装して集まったという。これは日常的にそのような条件反射があるということになる。（中略）日本の中世の農村では、村が武力を用意して村の縄張りを自力で守っていた。☆［注3」

「その頃は、今の警察制度みたいなものは行き渡っていませんよね」

「支配層が権力争いに明け暮れた乱世では、村法（掟）と自検断という治安維持上の自治権があった［注4］ことが、歴史研究が進むにつれ、かなり明確になってきたようだ」

「身近な問題は、自分たちで調べ裁くということですか」

「そう理解するのが正しいようだ。例えば、村うちでの犯罪の検挙や処罰は合議で行っている。また、徒党を組んだならず者の侵略から村を守るにも、相応の武力は欠かせないだろう」

「スローガンのうち戦費増税に反対することは誰でも解かりますが、寺社本所領というのは何のことか・・」

「歴史学者の間でも難問だったようで、郷土史の講演では、どなたもそこの説明になると口ごもり気味だった」

☆寺社本所領すなわち摂関家領は、守護不入権をもち、本所領は当時の村民のなかでも、守護領などと違って、明白に差別化された、いわば憧れの領主の土地だったと考えられる。☆［注5］

「守護に支配されるよりは、ましというわけ・・」

「長い期間の疑問の一つだったが、端的に言えばそんなところかも・」

☆一向宗の門徒たちは、富樫泰高を守護として奉りながらも、実質的に加賀の国を支配し、「百姓の持ちたる国」と呼ばれた。ただし、しばしば誤解されているように、守護がいなくなったのではない。泰高の曾孫である晴貞が一揆勢と対立して敗死したのは、もはや戦国も終わりに近づいた１５７０年のことであった。☆［注6］

「中央政権が指名した守護を討ったのだから、現代の感覚からすれば、民衆による反逆と捕らえられやすいが、事件当時はそういう見方はされていなかったようだ。つまり、都の権力者や守護とは曲りなりに折り合いがついていたのだろうね」

☆長享の事件から三年後の延徳三年(1491)に、細川政元が慶覚の館に一泊した。この時政元一行は、越前・加賀・越中から越後まで足を延ばしている。その途次である。☆［注7］

「慶覚とは・・」

「一向一揆は郡ごとに組織されたが、石川郡一揆のリーダー格の一人、州崎慶覚のことだよ」

「細川家といえば、確か室町将軍の管領を勤める家柄でしたね・」

「私も最初は、不可解な印象だったが、その頃の政治状況が分かるにつれて、その辺りは少しずつ納得できるようになってきた。ただ、簡単に説明しろと言われても難しいが・」

【富樫晴貞が描いたとされる「牽馬図」】［注8］

（2011.3.15）

［注1］神田千里著「戦国乱世を生きる力」－58－
［注2］金龍　静著「加賀の一向一揆500年」－119－
［注3］藤木久志著　　同上　－195－
［注4］［注1］に同じ　－75－
［注5］［注1］に同じ　—76－
［注6］八幡和郎著「戦国大名県別国盗り物語」－239－
［注7］中橋大道著「中世加賀『希有事也』の光景」－200－
［注8］中央公民館に展示されている富樫史料の一つ（複製）。所蔵は金沢工業大学。

0029：左義長

「中世の探索は、深入りするとキリがないので、しばらく中断して他の話題にしようか」

「そうですね。年中行事など軽めのものもいいと思います」

「手始めとして、左義長からいこうか」

☆村の年長者が、その年の暦をみてわざわいのない方向を定め、14 日に子供達が家々を回り、正月の〆縄や松花、ワラを集める。青年達が青竹を組み、それらを高く積み上げて日暮を待つ。薄暗くなると火がつけられ、子供達は書き初めを笹竹につけ、火炎に当てると、炎につつまれ空へ舞い上がる。高いほどその子は上達するというので、一斉に「ワーッ」と歓声が上がる。☆［注1］

「近年は、祭日の移動に伴い各集落の開催日も一定しなくなっているようだ」

「火は危ないと、日頃は近づけないのに、この日ばかりは大目にみられ、夜空を焦さんばかりに燃え盛る様は子供心にも勇ましく、寒さも忘れてしまうような開放感にひたれるものですね」

「『その年によりわざわいのない方向を定め』とありますが、町会を構成する世帯数が増えると、場所も周知しやすいよう公園地などに特定されてしまいがち・」

「時間帯も昼間に移されるなど、ある意味での形骸化は仕方ない。ところで、左義長という言葉の意味を史さんは考えたことはあるかな？」

「ちょっと変わった言葉とは思いますが、古くからの習慣だから・くらいの理解ですわ」

「私も、ずっとそんな理解だったが、歴史書などを読んでいると時折思いがけないところで、そういう習俗に対する回答というかヒントになる文に出くわす」

「何でしょう？」

☆徒然草第１８０段に、さぎちやうは正月に打ちたる毬杖（ぎちやう）を真言院より神泉苑へ出だして、焼き上ぐるなり。「法成就の池にこそ」と囃すは神泉苑の池を言ふなり。
漢字では「左義長」とか「三毬杖」などと書く。この「さぎちょう」が正月行事として広く行われているわりには、その由来や作法が不明なので、兼好は自分の知るところを書いたのであろう。珍しい貴重な資料となっている。「毬杖」というのは、木製の毬を打って遊ぶ時の槌型の杖のことである。☆［注2］

「何だかゲートボールみたい」（笑）

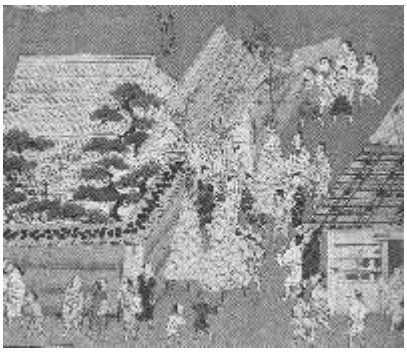
「案外ちかいかも・」

「兼好法師といえば、確か１４世紀の人でしたね」

「鎌倉時代も終わり頃、平安貴族の雅な遊びがすでに人々の記憶から遠ざかった故に残された文章なのだろう・」

「旧きよき時代を偲ぶ一章ですか」

「文章だけでなく、時代は下るが絵も残されていた」[注3]



「へぇー16世紀後半、室町時代ですか。左義長の形は今のものと似ていますね」

「試しに、日本史辞典で『さぎちょう』をひいてみた」

☆三毬打。三鞠打・左義長とも書く。民間ではどんど焼き・さいと焼きなどとも言う。古来の正月行事。宮廷では 1 月 15 日ころ、清涼殿の東庭に青竹を 3 本束ね立て、上に扇・たんざくなどを結びつけ、陰陽師や、のちには猿樂師などが集まり、歌いはやす中で焼いた。天皇は清涼殿上から見るのが習いであった。中世には武家でも行われ、民間では門松・しめ飾り・書きぞめなどを持ち寄って焼く悪魔払いの行事として各地に普及した。☆[注4]

「今ではすっかり庶民的な年中行事でも、もともとは、上流貴族の行事が長い年月を経て一般化しているんですね」

(2011.5.26)

[注1]「富奥郷土史」－923－
[注2]島内裕子著「徒然草をどう読むか」－120－
[注3]黒田日出男著「謎解き洛中洛外図」－93－
[注4]角川二版・日本史辞典　－400－

0030：虫送り

「虫送りは、篤志くんも行くよね」

「幼稚園のころから、たいまつを持っているよ」

「今は、揃いの法被など衣装にもこっているが、40 年くらい前の状況が記録されている」

☆夏の日のたそがれが迫るころ、合図の花火が打ち上げられると、各部落では準備された子供達のたいまつ（昔は束ねた薪であったが、のち青竹の中に石油で浸した布を詰め、現在は青竹の先端に布を詰めた空き缶をつるす）に火が移され、青年達が大太鼓を威勢よく打ち鳴らす。東西南北四線の道路には、それぞれ数部落の太鼓とたいまつが連なり十文字型に中心部へ向かって行進する。集結点の会場中央の大かがり火に火が入ると、十四の大太鼓が一斉に会場になだれ込み、競い打ちとなる。☆［注1］

「季節の衣装などは違っても、行事の大枠は同じですね。ところで虫を送るという意味なんですが？」

☆呼び名のとおり、水田の害虫駆除が目的で始まったらしいが、その発祥起源は明らかでない。昔から本村では盛夏土用入りころの7月20日に決められている。☆［注2］

「もっと、具体的な記述も最近みつけた」

☆年中行事っていうと、「田の虫送り」ってのがありました。これはね、まだ稲の花が咲いている時分ですワ。害虫をタイマツの火で焼くんですな。（中略）竹を割りましてね、中へワラを入れて、縄でところどころ縛って、一間ぐらいの長いタイマツをこさえるんです。ほいで、それに火つけて、田のぐるりを回りながら、こういう風にして田をこすってましたで、そのタイマツで。ええ、自分の田だけをやって、そいで最後に、村の端くれの一ケ所に皆が寄って、そこで余ったやつ全部燃やしまんネン。そうすると、虫がぎょうさん飛んできて、火の中へバタバタ落ちてましたがね。☆［注3］

「この辺だけの行事ではなく、関西でも同じようなものがあったのですね」

「殺虫剤など農薬が普及してからは、害虫を駆除するという意味は失われ、当地でも青年団活動の衰退に伴い一時は断絶しかかった」

「行事そのものが、途絶えたのですか」

「そうだよ・。だが、年配者の熱意から、どうにか行事は復活したが、農業との関連より、近年は夏の風物詩という側面が強調される催しとなっている。」

「子供たちを中心に、参加者が多く、楽しみですわ」

「発祥起源は分らないという郷土史の記述を紹介したが、最近その答えになりそうな文に出会った」

「聞きたいわ」

☆近世の村人の生活空間を、ムラ（集落・定住地）、ノラ（田畠・耕地）、ヤマ（林野・採草地）という三領域に分け（中略）。ムラには氏神（うじがみ）、ノラには野の神や田の神、ヤマには山の神といったように、それぞれの領域に固有の神が存在し、神を祀る行事が行われていた。各領域に関わる民俗行事――たとえば、害虫からノラの領域を守るために、ノラのはずれまで行列を作って、虫をノラの外に送り出す虫送り・・☆
［注4］

「長く続いている行事には、表面に現われているもの以上に深い意味が隠されているようだな。その辺が文献にあたる醍醐味でもあるのだが・」

「伯父さんらしいわ」

【参照「TOMIOKU」 －60－】

（2011.6.20）

［注1］「富奥郷土史」―933―
［注2］　同　―931―
［注3］藤本浩之輔著「明治の子ども遊びと暮らし」－253－
［注4］坂田聡ら著「村の戦争と平和」－99－

0031：じょんから

「これまでとは趣向を変えて、今回は俳句で綴る『野々市じょんから』といってみようか」

「おもしろそう・」

「まずは、この句から入ろうか」

ー　新調のじょんから浴衣藍匂ふ　　林　風声

「まっさらな木綿地に藍色が鮮やかなゆかたは、本人でなくとも、浮き立つ気分になりますね」

「社会状況の変化とともに、盆踊りから、イベント色の強い祭りとなり、開催時期も早まった。[注]　それでも、ハレの日を迎える踊り手の気持の昂ぶりや新調の浴衣を見守る周辺の思いが伝わってくる句だね」

ー　豊穣の千灯揺らぐ盆踊り　　藤村克也

「会場の櫓（やぐら）を中心に、行燈や大小の電飾が幾重にも張りめぐらされ、華やいだ雰囲気がただようのを、千灯の二文字で切り取ったのはうまいね」

ー　大太鼓一打に踊り始めかな　　古源和子

送迎バスや徒歩など、各処から三々五々集った踊り子が、大櫓を囲むように輪になって踊り出す。太鼓の合図で、ざわついていた見物人たちも一瞬静まり、大勢の視線が踊り子たちに注がれる。

ー　農の手を月にかざして踊るなり　勝田知子
ー　初秋や今宵ピエロに扮しおり　　進村五月
ー　一病を忘れて今宵踊るかな　　長田葉月

「農の手とは、踊りの仕草を言うのだろうが、農事に荒れた手とも読め、農作業に明け暮れた中のたまさかの休息だった盆踊り、詠者の若年時の生活を回顧した句とも解釈できる」

「揃いの浴衣もいいけど、ピエロなどいろんな仮装も楽しめますね」

「毎年同じことの繰り返し、踊りの動作も数分での繰り返し。そうなれば、人々の意表をつく扮装に変化を求め、おかしみを誘おうというサービス精神の旺盛な踊り手も出てくる」

ー　輪踊りやチョゴリの裾をひるがえし　進村五月
ー　仮装して踊り上手の現れし　　磯部俊子

「私も踊りたくなってきたわ・」

ー　走り出て子の帯直す盆踊り　　瀬戸初枝
ー　星深し踊り重ねて八十路かな　　瀬戸澄子

「踊りもたけなわ。まさに老いも若きも・・という図だね」

ー　菅笠を小脇に憩ふ白浴衣　　舘　比左子
ー　休憩の踊子母の顔となり　　増山光子

暫しの休憩時間も、詩魂は句作の題材を見逃そうとはしない。平成 5 年に初めて、じょんから投句大会が実施された。以後平成 17 年までに、毎年上位に選抜された句の中から任意に抜き出して、この稿を構成している。

ー　輪踊りのひと手遅れる法被の子　　中川　幾
ー　踊唄富樫称えるくだりあり　　西田富子
ー　目を閉じて吹く少年の祭り笛　　瀬戸初枝
ー　膨らみて母子を離す踊の輪　　小林　清

「チーム編成によるコンクールが終わり、後半に入るとジーパン姿の見物人らも踊りの輪に加わってきますね」

ー　踊り立つまで裏方でありにけり　　北　重子
ー　行列のしんがり野菜御輿練る　　館　宗一

「いろんな人たちが、それぞれの役割を分担して祭りが成り立つということだろうね」

ー　踊り笠外して月と帰りけり　　坂本千代江

今宵は、存分に踊りを堪能できた。そんな充ちたりた思いを胸に月明かりの中を家路につけば、汗ばんだ肌に夏の夜風が心地よい。

(2011.7.9)

［注］
昭和57年　第1回野々市じょんからまつり
じょんから踊りと野々市まつりを統合（広報6月15日号）
役場（現図書館）周辺で8月1日、2日に開催（広報7月15日号）
第1回の模様（広報8月15日号）
平成　2年　文化会館フォルテ周辺で開催
平成12年　土日に開催

0032:郷土史への視点

「伯父さんとの『わが町歴史探索』も、随分回を重ねましたね」

「そうだね、もう30回くらいかな。たってしまうと、いつの間にそんな回数になったのかな・という感じなのだが」

「用水脇の遊歩道で偶然出会ったのが、始まりでした。歴史など古臭い、今の私と関係無い、などと思っていましたが、私たちが住む場所や年中行事という現在こそ、先人たちの長い営みの積み重ね（歴史）の上に成り立っている。伯父さんと話していると、そこが少しずつ解りかけてきました」

「史さんが相手だから、知ったかぶりに話したことも多い（笑）が、手探りで内心冷や汗ものも少なくない・」

「いえ、そんなことないわ。伯父さんと話すと、自分も少しは勉強しなくちゃと思うんですが、なかなか実行できなくて・」（笑）

「私も若いころは、郷土史など老人趣味くらいの意識だったよ。50 歳代になったころから、近辺の寺や神社あるいは地名などの由来に関心が向き始めた。例えば 1997 年 8 月日付のメモだが、

> ☆「拝師（はやし）郷」 拝師郷　天歴以前　右称林郷、准大宝詔、取二字佳名也、今復作林郷、従簡易也（石川訪遊記）☆（注1）

と記されている。また、その下に

> ☆「和名抄」所載の郷。高山寺本に「波世之」、東急本・刊本に「波也之」と訓ずる。郷域は現野々市町上林・中林・下林を含む手取川扇状地東側から扇央部東半にかけての地区に比定される（日本歴史地名体系17）☆

と書きくわえてある」

「なんだか、堅苦しい感じですね」

「そう、必要最小限の記述だから、そっけ無いものだよ。地元のことだから、それでもメモくらいは残してきた。五年十年たち、こんなメモ書きのファイルがある程度厚くなってくると、学校時代にいやいや習った歴史との関連というか、郷土での出来事とどうつながるのか？という関心が生まれ、今はそういう視点での本の読み方になっている」

「そのあたりが、伯父さんの話がおもしろく聞ける理由なのかな・」

「そんな時、次の文章に出会った」

> ☆日本では郷土史という名のもとに、地域の開拓や交通・産業・土豪や旧家、神社や仏閣の沿革が共通の関心となっており、どの地方でも必ずといってよいくらい郷土史研究者がいるものである。どの地域の歴史も、より広域な社会の歴史と結びつくはずであるが、ややもすれば郷土史の愛好者たちの関心は郷土独自の話題に向けられるあまり、歴史学の中では孤立しがちである。
>
> こうした郷土中心の関心のあり方や歴史認識は、郷土の人々の生活現実に基づき、自己中心的な認識に立つもので、けっして体系的歴史の中に自身を位置づけようとするものではない。☆（注2）

「一人合点ということですか。『自慢らしい』という言葉を子供のころによく聞いたけれど、そんなニュアンスかしら」

「そう。虫の目ではなく、鳥の目で郷土を見ようということだろうな。例えば、富樫家国の銅像がフォルテの前庭にあるが、建立の推進母体は『富樫卿奉賛会』という。中世の歴史を少しかじると、この卿という文字に違和感を覚える」

「どういうことですか？」

「私が下手な説明をするより、一つふたつ例をあげよう」

【フォルテの富樫家国像】

☆貴族の中で三位（さんみ）以上の上級のものを、とくに公卿といい、今日の閣僚クラスにあたる☆（注3）

☆道長時代の終りに近い 1012 年（貫弘9）の宮廷貴族の状態を見ると、非参議まで全部含めて公卿と呼ばれるものは僅かに 25 人にすぎず、そのうち 19 人が藤原氏で、中納言以上は全部道長一門で占められていたといわれるが、これは宮廷貴族の社会が意想外に狭いことを示すよりも、むしろ宮廷貴族以外の零落した貴族の広汎な層の存在を考えさせるものである。
この層は地方に移住するか、または孤独な都市の住人に零落したものと考えねばならない。☆（注4）

「加賀の国司に任命され藤原末流を名乗った富樫の先祖は、確か従五位下でしたね」

「位は言わずもがな、まして地方に派遣された当時としては下級官人が、公卿と呼ばれるなど、本人の方がくすぐったいだろう」

「会への賛同者を募る際、中央から下ってきた人への尊称のつもりが、オーバーになってしまった・・」

「例えそうだとしてもね・。敬うことと根拠のない讃仰とは、似て非なるもの。いつまでも、看過されているのは疑問だよな」

「市制をしくなら、今のうちに正すべき・。それが伯父さんのホンネですか」

「まあね。（笑）むやみに崇め奉るのではなく、客観的な史観で富樫を語ってほしい・というところかな」

（2011.8.30）

［注1］舘残翁著 「富樫氏と加賀一向一揆」—17—
脚注；拝師（はやし）郷は、天歴以前には、林郷と称した。大宝の詔に准じて、二字を取った佳名也。今また林郷となす、簡易に従う也。
［注2］伊藤　亜人著 「韓国」—140—
［注3］高橋　昌明著 「中世の光景」—34—
［注4］石母田　正著 「中世的世界の形成」—342—

0033：御経塚の縄文遺跡

炎暑下、庭のサルスベリ（百日紅）や夾竹桃が、今が出番とばかりに咲き誇っている。

「こんにちは、暑い日が続きますね」

「そうだね。だけど、今年は熱帯夜が少なく、寝不足にならないで助かっているよ」

「先日、篤志が御経塚の縄文土器焼きの体験会に参加したのですが、あそこは国の指定史跡なんですね」

☆御経塚遺跡からの出土品 4,219 点が平成 22 年 6 月に「石川県御経塚遺跡出土品」として国の重要文化財に指定された。昭和 31 年の発掘調査以降、昭和 52 年 3 月に「北陸地方を代表する縄文時代後期・晩期の集落跡として国の史跡に指定される。（要約）☆（注1）

「あまり身近すぎて、国レベルの文化的な価値がある処とは知らない人が多いようだ」

「小学生のころ、遠足をかねた社会科の勉強で、私も行っていますが、なにしろ遊び盛りですから、友達とのふざけあいのほうに関心がいっていて・」

「まあ、縄文晩期などというと、大人でも興味を持つ人は少ないだろうね」

「篤志らと一緒に、資料館を案内してもらいましたが、三千年もの昔に、素敵な形の器を作っていたのですね」

「有名な『御物石器』は言うまでもなく、壷や甕（かめ）にもなんとも優美な姿のものがある。それにくらべ、今のふるさと歴史館は、展示施設としてはちょっと貧相な感じだね」

「真脇遺跡縄文館（穴水）は、おしゃれな感じの建物でした」

「うん、あそこの『お魚土器』には、感嘆したな。優美などと一言でいえない造形感覚のすばらしさは、6000 年も前の物とは信じられず、強く印象に残っているよ」

「ポーレポーレでしたか、温泉施設も隣接していた」

「お隣り福井県小浜の縄文館もしゃれたデザインで、展示法も工夫されていた。ところで、資料館は誰が案内したのかな」

「はい、説明を受けたのは年配の方、伯父さんより少し上だと思います」

「それなら市村さんだろう。あの方が中学生のころ、田圃の小川で土器片をみつけ、社会科の先生に見せたのが、発掘のきっかけという話だよ」

「うらやましいわ。自分の体験と、歴史が直接結びつくなど、稀な例ですね・」

「出土品の整理に、あまりにも長い期間を要したのは、少し問題だろうな。その分、一般町民に歴史的な意義を知らせるのが延びてしまったのだから」

「展示されている出土品では、玉（ぎょく）というのですか、ヒスイ製品に惹かれましたわ」

「やはりね。首飾りや腕輪に使われたと推測される翡翠については、この 50 年ほどで次のようなことが分かっている」

☆ヒスイは日本に産せず大陸から渡って来たものと長い間考えられてきました。しかし、1938 年に新潟県糸魚川市小滝川支流土倉沢からヒスイ原石が発見されました。翌年、現在の小滝川ヒスイ峡のヒスイ転石群が確認され、続いて 1954 年青海川（橋立）でも発見されました。このことにより、ヒスイは古代から日本で産出された宝石であったことが分かりました。
世界で最初にヒスイを使ったのは、約 5000 年以前の縄文時代前期末の人々だった。この翡翠文化は世界最古のもので、ヒスイは日本が世界に誇れる宝石でもある。☆（注2）

「県内にも橋立という地名がありますが、やはり糸魚川市内ですか」

「そうだよ。金沢のチカモリ遺跡や小矢部の桜町遺跡なども考慮に入れると、その当時なりの交易圏が想像されて楽しくなるよな・」

「チカモリは祭祀列柱が有名ですが、桜町は何ですか？」

「水さらし場だ。10年あまり前かな、どんぐりなどのアク抜きに使った水晒し場の遺構がそのまま発掘されている」（注3）

「採取したものを、そのまま食べるのではなく、事前に加工するということですか」

「そう。ところで白峰のトチモチを食べたことがあるかな」

「ええ、珍しいのでたまに買います」

「多分その加工法は、縄文期のそれと同じ延長線上にあると思われる。アク抜きの知識もなんだが、縄文時代に漆も既に利用していたことが、近年分かってきたようだ」

☆素地を作り、これに下地と塗りが加わった本格的な漆器とそのための工具が日本列島に出現するのは、縄文早期末から前期初頭（約 7000~6500 年前）のことだ。代表的な例に石川県七尾市の三引（みびき）遺跡（漆櫛）富山県射水市南太閤山 1 遺跡（漆塗りひょうたん）・・（略）☆（注4）

☆金沢市米泉遺跡（縄文後・晩期）からはクロメに使う鉢と漆濾し布が出土。（中略）縄文時代にも今日と大差ない漆器の工程と造形技術が存在したことを思うと、その知恵と感性に脱帽するほかない。☆（注5）

「不勉強で、そんな話は初耳・」

「赤外分光分析など、研究手法の進歩に負うところもあるんだろうが、新しい知見が随分増えているようだ」

「伯父さんと話していると、原始的な生活だった縄文時代というイメージが、すっかり薄くなるみたい・」

（2011.10.21）

注1：「のっティ新聞」'10 年 9 月号（第17 号－3－）
注2： 吉澤康暢 「自然人」'08（No17）－6－
注3： 北陸中日新聞 '98－7－25 号
注4： 四柳嘉章著「漆の文化史」—9—
注5： 同 －19－

0034：日本人とは・・

「伯父さんと問答を重ねていると、ふるさとの歴史というより、それを包みこむ日本とは何なのだろうか、そんな疑問がわいてくるのですが・」

「ほう、史さんでもそうなのか」

「たとえば、神社シリーズでは日吉社と比叡山のつながり、力石にからまる弁慶伝説など、この地方だけの話ではない・・」

「神社名では、春日・八幡・白山・諏訪社など全国いたるところにある」

「地方史というのは、全国的なうねりの中の一つの波というのかしら」

「そう、まさにそれなんだ。また、史さんにポイントを稼がれた」（笑）

「虫送りなど、地域独特の伝統行事と思っていたものが、その実全国的な広がりをもっていて、根底には民族の自然観みたいなものがひそんでいる」

「そこをもっと詰めると、そのような日本を形づくる日本人とは何なのかという処へゆくと思う」

「ふつうは、日本という国土に生まれ育ったから日本人・・、くらいの解釈で分かったつもりになっていますね」

「むろん、その中には言葉（国語）も含まれるが、それに関して次の抜粋文を読んでほしい」

☆現在日本の呉音として定着している漢字音は、おもにこの六朝期の音系（南朝の劉音）を反映していると言われている。六朝時代に使われていた音は、その時代使われていた漢文体、漢字そのものとともに日本に流れこんだ。
「宋書」（488 年）の倭国伝には、倭の五王が南朝宋と接触をかさねた記事が数多く残されている。またそのころ倭は百済との交流が最もさかんであり、その百済も南朝宋と接触をかさねていた（略） そのころ、我が国には独自の文字すらなく、自国語表記は「漢字」に頼るしかなかった。☆（注1）

「話し言葉はあったが、文字は無かった・。『漢字』は文字通り、漢の国の文字（外国語）だったのですね」

「歴史の授業では、太安万侶（古事記）などの人名と一緒に習っているだろうが、ふだんはそんな意識はないよね」

「万葉仮名から平安期の女流文学を生んだひらかなと、その使い勝手を一歩ずつ向上させて、現在の漢字かな交じり文へと連なっている」

「あいうえおの音韻体系とサンスクリット語の関連については、12 世紀ころ大聖寺に住んでいた明覚（みょうがく）師の功績が特記される。百済との交流については、次の文も興味深いよ」

☆例の飛鳥の石造物、亀石や猿石やらいろいろありますね。あれがどこから来たかということが、いろいろ問題になりますけど、なんのことはない百済の故地を歩きますと、ああいうものは続々出てくる。たとえば扶余に近い益山には百済時代の弥勒寺の大きな石塔がありますが、そこに猿石がある。それがまさしく飛鳥の石造物そっくりです。☆（注2）

「国内だけで考えていると謎でも、視野を広めると簡単に解けるのですね」

「玄海灘の沖ノ島や竹原古墳と新羅とのつながりなども、同書で指摘されている。もっと時代をさかのぼって、弥生時代後期の銅鐸についてのヒントが次の例だ」

☆前漢の初め、遊牧民の匈奴は西北から漢を攻め漢を悩ましていたが、やがて攻勢に出た漢に追われ、分裂して東西に散った。その中に南下する匈奴もあった。南下した匈奴は雲南から東南アジアにかけて定着していった。しかし紀元前１１１年から漢の武帝の南方への出兵により、東南アジアを追い出された匈奴勢力は黒潮に乗って沖縄や奄美大島・九州南部にたどりついた。

九州にたどりついた南匈奴は、すでに朝鮮半島から渡来して九州北部に存在した国々を避けて出雲地方に入り、さらに大和地方に進出した。そして東南アジア銅鼓系の特異な銅鐸文化を形成した。☆（注3）

「雲南というと中国でも奥地・。昆明でしたか世界遺産で有名な処は？」

「そう、民族も風俗も、揚子江下流の中原（ちゅうげん）とは大きく異なる。その昆明での印象記がある」

☆私は中国の昆明で、伊勢神宮の建物とまったく同じ様式の建物を見たことがある。漢時代の青銅の彫刻であった。まったく同じ高床式の建物が造られているのである。それは穀物倉であった。その周りに人びとが集まってお祭りをしている。豊穣を祈って、神にお供えもしている。それを見た時、私は農耕文明のはるかな流れを思って心を打たれた。☆（注4）

「昆明と伊勢神宮ですか、何とも想像を超える広がりですね。匈奴系の民族がリレー役を担ったということでしょうか」

「誰も明言はできないだろうが、南方から日本への強い影響は、次の文章からも推測できる」

☆1929 年洋行のさい、シンガポールで船を降りたところ、砂浜が長くのび、ごくわずかな本数の先だけに葉のあるヤシの木があった。また日本の神社の原型のような民家が少し並んでおり、この景色を見ているうちにひどくなつかしい気がした。

それはただのなつかしさではなく、異常な程度の強いなつかしさであった。その時以来私は、日本民族が南方から来たものであることを疑わない。☆（注5）

「なんだか、推理小説の謎解きみたいでわくわくしますね」

「そう。今回引用した文は、いずれも歴史書とは違うのだが、日本人や日本文化の原型を構成している要素が何処からきているのかという点で、示唆するものが多い例証ではないだろうか・・」

【伊勢神宮外宮の御正殿（注６）】

（2011.12.2）

注１：藤村由加著「人麻呂の暗号」―83―
注２：上原和ら著「美の秘密」―121―
注３：小林惠子著「本当は恐ろしい万葉集」―252―
注４：平山郁夫著「玄奘三蔵祈りの旅」―259―
注５：岡　潔全集（1）　－177－
注６：神宮司庁「神宮」より

0035：末松廃寺と和銅開珎（寶）　>>場所：

「御経塚の縄文遺跡と並んで末松廃寺跡も国指定レベルの文化的な価値を持っているのでしょう」

☆昭和41年、文化財保護委員会（現文化庁）は、末松廃寺跡を史跡公園として整備することとし、発掘調査及び史跡環境整備を行った。これは、百済寺跡（大阪府）、多賀城跡（宮城県）につぐ全国3番目の国庫補助事業だった☆（注1）

「この報告書の発刊を機に、09年11月のシンポジュームが催され、いくつかの新知見が発表されたが、市民に広く周知するまでには時間がかかるだろうね」（注2）

「末松廃寺というと和銅開珎がセットのように言われますが、その意味がよく分らない」

「昭和36年、高村誠孝氏（末松）が用水路で発見した和銅開珎が学会の注目するところとなり、地元有志の運動もあって国指定の伏線となった」（注3）

☆708年正月、武蔵国の秩父郡で発見された自然銅が献上され、それにちなんで、年号が和銅と改められた。ついで五月に銀銭、八月に銅銭が発行された。この銀銭と銅銭こそが和銅開珎だ。☆（注4）

「御経塚は市村さん、そして末松では高村さんですか」

「おっ、うまい。そんな見方もあるか（笑）」

☆また支払手段、流通手段としての貨幣というだけでなくて、和銅開珎は、一種の呪術的な使われ方もしている。たとえば、寺院を建てる時の基壇に和銅開珎を必ず置く。あるいは美濃の不破の関の発掘によって知られたことだが、和銅開珎が何枚か建物の隅に置かれている。そのような呪術的な意味をもって用いられることがあった。☆（注5）

「単なる貨幣としてではなく、おまじない的な使い方ですか」

「物々交換的な交易の中で、何とでも交換できる便利さが、一種魔的な力を持つ物として受け取られたようだ。そのような時代背景はともあれ、最初に伽藍が建てられたのは660年代と推定されているが、銀銭が鋳造された年とのギャップが気になる」

「40年以上の隔たりは、工事の遅れなどといった理由とは別でしょうね」

「さらに、60mの高さになるとされる塔が、未完のままだったようだ」

「それが、壬申の乱（672年）とからめられている理由ですか・・」

「地方のことだから、文字としての記録はまず望めない。越前の深草廃寺や越中の御亭角廃寺ら周辺の史跡を含めての考古学（発掘）史料による推測なんだろうね」

「高さが60mとは、1300年も前のものとは思えないわ」

「他の発掘調査（注6）などが推定の根拠にあるのだろう。出土するはずの瓦がみつからないなど、塔が未完だったのは政治状況よりむしろ北陸特有の雷に因るのでは・・。これは素人だから言えるのだが、いまでもここら辺の高い建造物への落雷が珍しくないからね」

「専門家の盲点ですか・・」

「先の報告書にもどるが、図表を除くと280ページあまり。その半分以上が吉岡康暢氏（国立歴史民俗博物館名誉教授）により記述されているが、実は私が高校一年時の学級担任の先生だったという縁がある」

「えっ、まじで？」

「史さんでも、そんな表現をするのか。（笑）その頃の私は野球部に属し、まさに体育会系だったから、地歴クラブとかいう変わった名前の顧問をされている吉岡先生には、あまり関心はなかった」

「それが、今では一番（？）の理解者・・」

「それはオーバー。（笑）そんな縁もあって、シンポジュームには参加したよ」

☆塔心礎は戸室石ではなく手取川の安山岩と分かった。さらに瓦は旧辰口町湯屋で焼かれ、単弁六葉蓮華文は末松廃寺独特。これらから、財部造・道君・江沼臣など地方豪族の協力下に建築されたらしい（要点のみ）☆（注7）

「僅かな手掛かりをもとに復元を試みる・・。推論の過程を理解するには、ある程度の基礎的な知識がいるようですね」

「未知のことが多いから、様々な分野の研究者の協力が必要なのだろうね」

【末松廃寺のイメージ映像】

（2012.01.31）

注1： 文化庁刊行「史跡　末松廃寺跡」 序より
注2： ふるさと歴史シンポジウム「いまよみがえる末松廃寺」
注3： 富奥農協刊行「TOMIOKU」－48－
注4： 栄原永遠男著 「日本の歴史4『天平の時代』」－80－
注5： 網野善彦著 「日本の歴史をよみなおす」－44－
注6： 小学館刊 「日本の美をめぐる4」－17－
注7： のっティ新聞15号（‘10－1） 4～5ページ

0036：富樫略史　じょんから音頭

「第 31 回で、野々市じょんからを取り上げたが、今回はその続編・」

「確か、俳句で踊りの情景を綴るという楽しいものでしたね」

「踊りの音頭には、かっては『あさぎ返し』や『和尚おとし』など、いろいろな歌詞が唄われたようだが、近年は『富樫略史』が繰り返し流されているようだ」

♪　時の帝（みかど）は　一条天皇　雪に埋れて　開けぬ越路
♪　加賀の司に　富樫よ行けと　勅諚かしこみ　都を後に　（脚注）

「音頭に出てくる一条天皇やその時代について、次のような文章に出会った」

☆紫式部が「源氏物語」を起草したのは、長保三年（1001）。結婚して三年目にして、夫と死別した年のことである。第 66 代一条天皇の中宮（后）の女房（側近）の一人になったのは、寛弘二年（1005）頃とされる。彰子中宮の父である藤原道長が物語の評判を聞いてスカウトしたのである。一条天皇にも文才を称えられた式部は、つぎつぎに物語の巻数を増していった。☆（注1）

【女房装束で物語の想を練る式部】

「へー、源氏物語が生まれたころの天皇だったのですか」

「もう一人いるんだ」

☆いまから約一千年前の昔、時は一条天皇の御代のこと。関白藤原道隆とその娘である中宮定子が天皇のご寵愛を得て、華々しい栄華の日々を過ごしていたころ、この才気煥発の中宮に女房としてお仕えしたのが、「枕草子」の作者、清少納言だった。　☆（注2）

「清少納言もですか。『枕草子』なら、古文などの授業で少しはかじっています」

☆金太郎こと坂田公時（金時）は、66 代一条天皇（在位 986～1011）の時代、つまり、平安中期の紫式部たちが活躍した頃の人だった。京都府北部の大江山の鬼酒呑童子を退治したことで知られる源頼光（948～1021）の四天王の一人である。☆（注3）

「こういう記述にあうと、その時代がぐっと身近に感じられるから不思議だよね」

☆紫式部の父は藤原為時、長い間式部丞をつとめたので、地方長官になりたい希望を持っていた。その希望はかなえられたが、淡路守。為時、これを悲しんで嘆願書を一条天皇に奉り、（略）任地を越前に変更された。為時は感激して、女（むすめ）の紫式部をつれて、越前の国府（武生）に赴任。
18・9 歳のころ、しばらく越前へ下ったのが、紫式部の京都を離れた唯一の経験・・ ☆（注4）

「これは、加賀介として忠頼が当地に下向してきた時期と相前後する」

「父に同行した故事があって、武生に紫式部公園ができたのですね・」

「『枕草子』178 段したり顔なるものの一節に

☆（前略）また、除目に、その年の一の国得たる人。（後略）☆

という文があって、次のような注釈が付されている」

☆「国を得たる人」とは、現代の県知事に当たる地方国の長官、いわゆる受領である。中級階級の貴族は、中央官庁の下っ端役人でいるより、地方でもよいから一国の主（受領）になりたがった。徴税権により財力を蓄えることができるからである。（中略）
だから「除目」（大臣以外の官職の任命式）が近ずくと、たいへんな騒ぎになる。大国・中国・小国合わせて68ケ国のうち、任期四年の切れる国が毎年いくつか出るのだが、そこに多くの志願者が殺到する。☆（注5）

「なんか、優雅な平安時代のイメージが崩れそう・」（笑）

「春は曙・・など、『枕草子』は体言止めのきりっととした文体が多くて、注釈にあるような裏の事情を知らないと何を言っているのか判らないこともあるが、いつの時代も利権をめぐる駆け引きはすざましいものなんだろうな」

「それに比べ、富樫略史はきれいごと過ぎると言いたいのでしょう・。伯父さん」（笑）

「まあ、盆踊りの音頭だから、そこまではね。ただ、景気づけが中心のこのての歌詞によって富樫氏の治世をイメージするのは、贔屓の引き倒し。他所の人には、歴史認識を疑われるだろうな」

（2012.2.14）

脚注： 木村素堂作 「昭和3年7月 レコード吹込権所有」
注1： 河合真如著 「絵で見る美しい日本の歴史」-158-
注2： 萩野文子著 「ヘタな人生論より枕草子」-4-
注3： 関 裕二著 「おとぎ話に隠された古代史の謎」-73-
注4： 平泉 澄著 「物語日本史（上）」-220-
注5： [注 2]に同じ -65-

0037:末松廃寺と郷用水

「こんにちは、今年は寒い冬でしたね」

「年をとると余計こたえるよ」(笑)

「先日の末松廃寺(第 33 話)は、和銅開珎や塔の高さの話でした」

「発掘された考古学的な資料から推測されている事柄だ。今回はその続編」

「ふつうだと、何故高い塔を建てようとしたのか、その目的は何なんだろうかと考えますね」

「そこなんだ。早くから、私は郷用水とその近辺に「寺」のつく地名が多いことが気になっていたが、その疑問を裏づける文を目にしている」

☆扇状地の遺跡は、この郷用水系に集中している。そして、この水系には「寺」のつく地名が多い。上流部の知気寺、中流部の蓮花寺、西川・中川筋には安養寺、福正(聖)寺、専福寺等がある。その他古代・中世の廃寺跡や寺に関する小字地名が多い。これらはみな郷用水の地域が早く開かれたことを証明するものである。☆(注1)

「旧松任市では、源平島など島のつく地名が目立ちますけど、こちらは寺ですか」

「先の報告書でも、次の文節がある」

☆末松 A 遺跡を貫流する大溝は、7世紀末の公権力による組織的な労働力の徴発と、労働用具の提供による扇央部の開発を具現する遺構と評価できよう☆(注2)

「開墾は農繁期を避けると冬期が中心。厳しい寒さの中で過酷な労役に駆り出されると、犠牲者の数も少なからずあっただろう。」

「そう言えば、蓮花や安養など死者への供養を想像させる名前みたい」

「なかなか鋭いな。知気や福聖は功績のあった指導者の名前に由来するのかも・。そのころは、土木の先進的な知識は、僧侶たちが担っていたからね」

「近くには、富光寺や道法寺という地名も。聞きなれた集落名にも、先人の営みの姿が秘められているんですね」

「開拓集団についてだが・」

☆清金アガトウ地区を含め、集落が成立した7世紀末の竪穴建物の同時存在数は20棟前後、200 人ほどの住民が想定される。これは、移民集団を中核とした計画的な開拓村・・☆(注3)

「そこまで分かっているのですか・」

「さらに、用具など製鉄遺跡も近くにあった」

☆礫床の掘削に不可欠な大量の農工具は南東1.8Kmばかりの上林新庄遺跡で、3小群ほどの工人集団が専業的に鍛鉄生産に参加し、集約生産が行われていたことは確実で、扇央部の開拓集落群を主たる供給対象とした拠点的な長期継続型の鍛治集落である☆（注4）

「へー、末松だけでなく、清金や新庄にもその頃の遺跡が見つかっているのですか」

「用水の整備とそれに必要な工具や人々の生活物資の生産について、報告書では、

☆7世紀後半の手取扇状地の開拓は、浅香年木氏以来強調されて来た公権力の発動による灌漑網の整備をテコとする面的開発と、考古学的成果が明らかにした計画村の編成、領域的編戸をめざす動きに、製鉄・陶（須恵器）・塩業など生産遺跡が本格的に稼働することと相即する☆（注5）

と結論づける。」

「すごく組織的ですね。とても 1300 年も前のことと思えないわ」

「そして、周辺の広坂廃寺や三小牛ハバ遺跡なども考慮しながら、吉岡氏は次のように推論している」

☆遠来の移民主体で推進された公的開発のランドマークとすると、巨大な塔が石川平野の全域から遠望されるモニュメントとして、視覚的効果が強く期待されたものか。☆（注6）

「古代史につらなるロマンとでも言うのかしら・」

「末松の遺跡は、当市にとって歴史的な連想の働く数少ない場所だろうね」

【金沢平野の開拓（8・9世紀頃）】

（2012.3.30）

注1：手取川七ケ用水誌（上） -572-
注2：文化庁刊「史跡　末松廃寺跡」 -103-
注3：　〃　-101-
注4：　〃　-102,108-
注5：　〃　-122-
注6：　〃　-86-

0038：扇状地の開墾と支配　　勢力交代

「この故知問答を始めようと考えた時には、おおよそのテーマを書き出し30～35編くらいと踏んでいた」

「じゃ、ぴったし。（笑）3 年くらいのお付き合いでした」

「石碑や神社シリーズは多少羅列的だったが、ふだん見過しがちな処にも時代のあり様を示す刻印が残されていた」

「いろんなエピソードが聞けて楽しかったわ」

「昭和 30 年代半ばまで、当地では農業が基幹産業だった。近現代のできごとを主に取り上げたが、資料に当たっていると自身の体験と重なり、身につまされることも少なくなかった」

「篤ちゃんは・・」

「大きなハコみたいな電車は、おもしろかった」

「松金線のことだね。当市は平坦な地形で、自然といえば用水と田圃。その水の源としての霊峰白山は、自然史的スケールでの歴史があった」

「左儀長や虫送りにも、地域の伝統行事的な見方以上の深い意味が隠されていました」

「末松廃寺以降を通史的に振り返るため、次のメモと略年表を見て欲しい」

☆石川平野の新興勢力として、7世紀前半に扇状地へ進出し川原石積横穴式石室墳を築造した勢力があったが、上位の古墳が平野部に存在した形跡はなく、これらは7世紀後半に新たに入植した開拓移民集団に吸収・編入されていったとみられる☆（注1）

「その人たちが、扇状地を開いていった」

「日本史年表を参照すると、『660 年に百済が唐・新羅連合に敗れ、日本に救いを求める』さらに『663 年白村江の戦いに敗れ、任那（みまな）を放棄』とある。移民の多くは、これらの動乱を嫌った渡来人かもしれないよ」

「そこまで考えるのですか・。鉄器を利用する技術を持っていれば、少しの荒地などはものともしない・・」

「文明の発展は、常に異民族との交流から生まれているからね」

「そして、823 年には越前国から加賀の国が分離設置されてます」

「手取の暴れ川から北東側で開墾が始って 150 年くらい、それなりに安定した生産力が備わってきたのだろうな。先の報告書にも、次のような一節がある」

【中世の略年表】

☆拝師郷は、延暦8～11年（789～792）ごろの長岡京出土木簡に「拝師白米五　コ」とみえるのが、唯一の文字資料である　☆（注2）

「紀貫之も加賀に来ているのですか。伯父さんは有名人ばかり漁っている・」（笑）

☆紀貫之の官位は御書所預から始まって（中略）、さらに行政官僚としても加賀介、美濃介、右京亮、土佐守、玄蕃頭、朱雀院別当、木工権頭まで上がったが、本領は宮廷歌人であった。☆（注3）

「貫之の『土佐日記』は920年ころとすれば、その10年くらい前に加賀に赴任していたことになる」

「略年表を見ると、10世紀末に忠頼が加賀介として下向していますね」

「この人か、その子孫がそのまま土着して加賀斉藤（林氏）の始祖となっているようだ」

「だとすれば、承久の乱で中央との繋がりが断たれるまでの、200年くらいが林氏の時代だったと・」

「そう言えるだろうな。その後100年余り、加賀は鎌倉幕府の直轄地とされた」

「あまり、そんな話は聞きませんね。じゃ、富樫介や加賀の守護としての富樫は150年前後・」

「一向一揆の支配が100年くらいとすればね」

「じゃ、富樫500年という表現は少し大げさ・・」

「まあ、富樫の系図の根拠となっている『尊卑分脈』自体が室町期の作。また僭称（せんしょう）という問題もあるからね・」

「僭称というのは、宴会などで乾杯の音頭に指名された人が『僭越ながら・』とよく言いいますが、あんな意味かしら」

「そう、そんな立場でもないといったニュアンスだよね。地元ではえてして、身びいき的な見方になりがち・」

「郷土のことだからこそ、そこを数歩下がって考えよう。それが伯父さんの姿勢ですか？」

「独善的な面もあっただろうが、何か視点を設けないとストーリは組めない。史さんが時折示す『？マーク』に、私の一人合点というか突っ込み不足を気付かされた。積み残しはいくつかあるが、『わが町歴史探索』は今回をもって、一区切りとしたい・。長らくの付き合いを感謝するよ」

「いえ、とんでもない。こちらこそ、ずい分教わることがありました・」

数日前より、ポツリポツリと咲きだした庭の雪柳が、一斉に開花した。淡雪がふり積もったかとみまがうくらい白さが際立ち、浅みどりの小葉を背に遅かった春の到来を告げている。

（2012.04.11）

注1： 文化庁刊 「史跡　末松廃寺跡」 -135-
注2： 〃 -116-
注3： 高橋睦郎著 「読みなおし日本文学史」-63-

伯父と姪の　故知（こち）問答

連載編集メンバー

宮　川　　貢
早　川　彰　一
大　島　洋　行
松　田　尚　子
多　田　富喜男

２０１２年（平成２４年）５月

発行：（公財）野々市市情報文化振興財団

新着情報(RSS)

Pickupガイド

でじたるbook

The Encyclopedia of Nonoichi area by Mediawiki

NonoWikiは「ののウィキ 検索」からスタートします

全文検索

カテゴリー一覧　ページ一覧